

2020年4月新橋演舞場公演用

齋藤雅文 作ならびに演出

「有頂天作家 ……恋文屋一葉2020……」 二幕

場割

第一幕

プロローグ

第一場 弥生坂、加賀美邸

第二場 吉原、大黒屋

第三場 滝泉寺町、奈津の店

第四場 加賀美邸

第五場 池の端、不忍池

第六場 奈津の店

第二幕

第一場 加賀美邸

第二場 大黒屋

第三場 奈津の店

第四場 不忍池

第五場 加賀美邸

第六場 奈津の店

エピローグ

登場人物

- 前田奈津 「恋文屋」という代書屋。
羽生きく 川越の農家の主婦。
加賀美涼月 大衆小説家。
羽生草助 小説家志望。
桃太郎 吉原芸者。
片桐清次郎 涼月の弟子。
馬場 同。
友繁 同。
田熊哲 新聞の編集者。
谷初子 文芸誌の編集者。
お筆 加賀美家の女中。
浅吉老人 鏝（かざり）職人。
おたみ 浅吉の孫。
此花（このはな） 大黒屋の花魁（おいらん）。
小虎 吉原芸者。
しめ子 同。
大吉 同。
鈴弥 同。
お豆 大黒屋の遣り手。
梅春 大黒屋の女郎。
左京 万年屋の女郎。
お常 大黒屋の仲居。
山下の増三 やくざ。
えい公 増三の乾分。
重 同。
次郎 同。
郵便配達夫
美術学校の女学生
買い物
町の人々

プロローグ

幕が上がる。舞台は回り続けている。
加賀美邸と奈津の店などの建物が中央にあるが、「明治の末の人々の暮らし」が見えればそれでよい。
舞台が廻るにつれて、立ち働く人々の姿が、「廻り燈籠」のように見えて来る。

たとえば以下のように……。

奈津が女客を相手に手紙の代書をしている。

水を汲んだり、洗濯物を干したり働く人がいる。

加賀美涼月が原稿用紙に向かっている。

弟子が廊下を拭いている。

やくざが町の人々に煙たがられながら通っている。

畑から芋を収穫しているきくがいる。

歩きながら本を読んでいる草助がいる。

朝風呂へ行く芸者たちがいる。

太鼓の稽古をしている桃太郎がいる。

それらを縫って郵便配達夫が人々に手紙を配って歩いている……など。

歌① 「私への手紙」(全員)

全員

おはよう こんにちは

おはよう さようなら

ぐるぐる廻る毎日

当たり前のお日様 当たり前の今日

ぐるぐる また言えるかな

おはよう こんにちは

おはよう さようなら

奈津

いろはの文字を 力のかぎり

筆の翼に 思いを乗せて

きく

この手紙 今 あなたに送る

二十年先の 私へ

涼月

「無事にいるか？」

初子 「元気ですか？」

桃太郎 「お達者かしら？」

片桐 「しあわせですか？」

全員 おはよう こんにちは

おはよう さようなら

桃太郎 大切なもの 大切な人

そばにいる ただそれだけでいい

きく 一生に一度 燃える思いに身をこがし

奈津 樋口一葉のように 生きた証し残して

女たち 生きられたかしら 私は

涼月 二十年のちの私へ この手紙を送る

男たち いろはの文字を力のかぎり

女たち おはよう

男たち こんにちは

全員 おはよう さようなら

第一幕 第一場 弥生坂、加賀美邸の書齋と居間

舞台は、ほぼ中央より大きく二つの部屋に分かれている。

上手が、先生の仕事をする書齋で、畳敷きで和風。正面の襖は書庫である。下手側が、少し低くなった板の間で、こちらは洋風の造りである。この部屋は、弟子たちが、先生に命じられた仕事などをする場所であり、同時に編集者や客人のサロンとしても使われる。中央奥より、上手側に向かって、凝った手摺りの階段が二階へ上がっている。二階は先生の寝所となっている。(これは見えない)

下手は玄関へ通じており、廊下はそのまま二つの部屋の前を回り(縁側となり)上手へと続いている。上手は、勝手、女中部屋などへ通ず。この書齋と広間のしきりは特になく、上下の廊下との境には、障子戸が入っている。

る。

下手の障子を出た奥に、弟子たちの書生部屋がある。舞台前は、庭。上下とも庭づたいに入ることができる。

上手の書斎の中央には、威厳に満ちた座卓が置かれ、脇に洒落た手あぶり、蓑盆など。正面に大いなる仏壇。その上に亡師尾崎紅葉の遺影。

壁面のほとんどは、和漢洋の本で埋め尽くされている。「文章報國」の扁額。

下手の広間には絨毯が敷かれ、中ぶりなテーブルと椅子が二脚ほど。ほかにスツールがあっても可。花瓶、掛け軸、花、中国風の衝立とか屏風などが、先生のややエキセントリックだが凝った趣味をうかがわせている。壁には額入りの絵や書など多し。この広間の下手前、障子に貼りつくように小さな座卓があり、弟子用の机。多くは馬場が陣取っている。団扇立て、釣り忍など適宜。

庭には、鬼灯、朝顔の鉢など。

明治四十三年八月下旬の午後から夕暮れ。

日暮らしの声のみ。釣り忍の音が時おり。

新聞社の文芸欄編集担当の田熊と大手出版社の若き女性編集者・谷初子が、加賀美涼月先生の原稿を待っている。涼月は二階で日課の午睡中である。田熊は扇子をばたつかせながら、高弟の片桐と下手洋間のテーブルで、6将棋をさしている。二番弟子の馬場は置物のように端座し、下手前の机に向かい、師匠の生原稿で印刷所のゲラを校正している。玄関番の友繁は、上手書斎の座卓の前で新聞の切り抜きなどを整理している。初子は初めての原稿取りで、好奇心旺盛にこの作家の家をあれこれ覗きまわっているところ。

初子

(写真を指さし) これ尾崎紅葉ですわね？

友繁と馬場、反射的に立ち上がって答める。

馬場

「先生」ですよ、紅葉せんせい！

田熊

呼び捨てはまずいね。亡き文豪尾崎紅葉先生は、ここの加賀美先生にとっちゃ神(かみ)仏(ほとけ)のような方なんだから。

片桐

家(うち)の先生は変わってるよお。(打つ)

友繁

(洋装の初子の蝶のような風情が気になってしょうがない) なにしる潔癖でしてね。例えば、畳の線がこう(手で示し)あるでしょ、それに対して、机がちょっとでも斜めになっているとだめなんです。いるでしょ、そういう人。

初子 ええ、います、いますわ。そういう人。

友繁 埃っぽいものが嫌いでしょ。それから、長い物、ニヨロニヨロしたのが大の苦手。

政治家、博打打ち、芸者……。

初子 芸者？

田熊 (続けて) 私のような、新聞連載の担当編集者。

上手より出た、女中のお筆が、田熊と初子へ麦湯を出す。

お筆 いらっしやいまし。

田熊 いやあ、いつも恐れ入ります。

片桐 (打つ) 評判なんですって、先生の新しい連載。

田熊 新聞を再版しようかという珍なる話も出ているくらいだ。

初子 『白(しろ)孔(くじ)雀(やく)』。すばらしいわあ。あの主人公の白(しろ)妙(たえ)っ
ていう芸者。(うっとり) 儂げで、いじらしくて……あら、先生は芸者がお嫌い
だって、今、おっしやいませんでしたかしら？

お筆、初子の麦湯を座敷の方へ出し、去る。

田熊 文壇七不思議のひとつだね。(打つ)

片桐 「ありがとうならバツタははたち」だ。(打つ)

田熊 わ！……ええ！(駒を放る)あー、暑い暑い！

田熊、立ち上がって縁先へ。初子は麦湯を飲みながら友繁の仕事
を覗く。二階より、麻の着流しの涼月が降りてくる。正面の額を
さらに几帳面に直す。一同、居住まいを直す。

涼月 ……あー、田熊君か、ご苦労さん。

友繁、お筆に、起きたことを伝えるに上手へ入る。

田熊 今回の『白孔雀』、大層な評判で、おめでとうございます。この後(あと)の事を考
えると、もう胸が高鳴ってまいりますなあ。

涼月 そうかねえ。

と、あまり取り合わずに、仏壇へ向かう。その大家然とした態度
に、内心の不快感をほの見せる田熊。

玄関の鈴。戻った友繁「またか」と言った感じで去る。

涼月 (初子に気づき、ちょっと眉を曇らす)

片桐 『文芸倶楽部』の新しい担当の方……だそうです。

初子 来月号からお書きくださる『翡(ひ)翠(すい)鳥(どり)』の担当を勤めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

涼月 (ちょっと苦手そうに) ああ、そう。……うむ。

お筆、お絞りとお茶をもつて出る。

涼月 お筆さん。お仏壇の前が汚いねえ。

お筆 お前たちのようなガサツな連中には触らせたくないとお叱(こ)言(ごと)を頂戴いたしましたので。

涼月 (手を拭きつつ)それは言葉の綾というものだ。言葉の裏を読み取ってもらわねば困るじゃないか。ここは文士の家なんだから。

お筆 言葉の綾取りでございますね。

初子 まあ、お上手! (二人に睨まれて、たじろぐ)

お筆 (強く)ガサツでございますよ、私は。

涼月 ガサツも触っていいから。

お筆 承知いたしました。(回りを拭き始める)

友繁、数通の手紙を持って戻る。

友繁 郵便が届きました。(先生に手紙を渡し、馬場の方に回って)馬場さんには、博文館からの校正分です。

涼月 (手紙を見て)お、一葉先生からだ。(机に戻る)

初子 一葉先生?……ってあの?

涼月 知っているのかね。

初子 もちろんですわ。でも……。今年が明治四十三年ですから、ええと、もう十四年前に……。

涼月 「……しのぎよき時分、お見舞いにお訪ね申し上げ度く存じおり候……」来るそうだよ、今日。

初子 えっ? それじゃ、亡くなったってというのは?

田熊 本当だよ。

友繁 (わざと不思議そうに)するとその葉書は、十四年間もどこかをさまよっていたということになりませぬ。

初子

(葉書をのぞくように) まあー、不思議。十四年前からの手紙？

田熊

大人しそうに見えて、強情だったそうですからね、何か思いが残って、こんな手紙が、今頃……。

初子は本気にして、表情が硬くなり始める。涼月も弟子たちも、口裏をあ

わせたように神妙な顔付き。田熊は笑いをかみ殺して見ている。

と、玄関の鈴が、儂げにチリチリ……とゆっくり鳴る。

弟子三人が、不安げにそろって立ち上がるので、

初子

(おびえて) ええー……！

男たち一斉に笑い出す。友繁、玄関へ行く。

田熊

(大笑いして) いや、実に間のいい客ですな。褒めてやりましょう。

初子

?……ええ? どういうことですか?

田熊

仇名だよ。仇名なんだ、一葉っていうのはさ。本名は前田奈津。先生とは紅葉門下の兄弟弟子で、女流小説家としてそこそこは売れそうだったんだが、一葉さんの……つまり、本物の樋口一葉の小説にぞっこんほれ込んで、そっちへ改めて弟子入りしたんだ。だが、運悪く、すぐ一葉さんが亡くなって、そのまま筆を折ってしまった。確か、一葉さんゆかりの竜泉寺町で手紙の代筆屋をしているとか。そうでしたね、先生。

涼月

こうやって時々、私の作品をこきおろしに現れるのさ。

初子

まあ、先生。意地が悪くていらっしやること、嫌いだわ、もう。

なれなれしく、涼月の肩など叩くので、一同啞然とする。

友繁が玄関より戻る。

友繁

また、あいつですよ。先生、どうなさいます?

片桐

入門志願か?

友繁

三日目ですよ。作品を読んでいただくまで帰らないって……。

涼月

……よし、通しなさい。

友繁

はい。

友繁、玄関へ去る。お筆は興味深そうに上手に座る。

田熊

(あわてて) 先生! そんなものにお会いになる前に、今日戴ける分を、まず、そ

の、……。

初子 (つられてあわて出し) 私共のほうも、必ず今日中に第一回分を頂戴して帰るよう
に厳命されてまいりましたの。

田熊 (苛立たしそうに初子へ) あんたのところは来月だろう? うちの、明後日の分ま
でしかないんだ。

初子 そんなことおっしゃられても、私だって手ぶらじゃ帰れませんわ。

羽生草助が、友繁に連れられて登場する。よれた白緋。風呂敷包みの原稿
を大切そうに抱えている。草助は、先生の部屋の前の廊下に座ると、友繁
に促されて、原稿を出す。そのままぺこりと頭を下げ、蛙のように手をつ
いてじっと涼月を見つめている。

涼月 (原稿を揃える) ごほん……。 (埃っぽい) ……ああ、君ね、もう少し下がりがな
い。なんだか埃っぽいね。

草助 は、はい。(あわてて飛びすさる)

涼月 ごほん。そっと動きたまえよ、そっとね。(なお読む)

草助 は、はい。

間。

初子 (少し声をひそめ) 喉が乾いているのじゃなくて?

草助 (うつむいたまま、こっくりする)

初子 お筆さん。お水ですって。

お筆 (無然として上手へ入る)

草助 ありがとうございます。(口の中まで乾いているようだ)

初子 いいえ、たいしたことじゃございませんわ。

弟子たちは、呆れて見ている。

田熊 国はどこだい。

草助 川越です。

片桐 家出だろ、どうせ。

草助 (頷く)

田熊 親御さんは?

草助 父は……早くに朝鮮で死にました。うちは、百姓をしています。母は、文士なんぞ
とんでもねえって、そりゃもう、すごい剣幕で……俺は……でも……。

お筆、上手より、水を持って出る。

お筆 (草助へ渡す) どうぞ。

草助 (一息に飲み干す)

お筆 (それを眺めて) ばさばさですね、この子。

草助、盆へコップを返す。お筆、上手へ入る。

涼月 だめだね！

草助 は……。 (再び蛙のようになる)

涼月 何だね、この「言うに言えない思い」っていうのは？ ほら、ここにも「言葉に尽くせない気持ち」……とあるね。言うに言えないなら文章など止めてしまえ。言葉が尽くせないのなら小説など志すな。未熟でもいい、だが、言うに事欠いて、「言うに言えない」とはなんだ。表現の放棄だ。君は自分の筆を最初から捨てているのかね。

草助 ……。

涼月 (庭の鉢植えを指し) 鬼(ほお)灯(づき)のあの色は？ 赤か、朱色か。茜か？ 今日の日暑さは？ 今日の風は？ お前は「言うに言えない」でみんな済ませるつもりなのか！

草助 は……。はい。(唇を噛む)

涼月 衆目の前でののしられるこういう思いは、何と表現するのだ？ いま、鳴った風鈴の音は、どう聞こえる？

草助 (頭に血がのぼっているのだ。思わず) ……チ、チリ……ン。

啞然とする涼月、固唾を吞んで見守っていた一同、大いに笑う。言っ

まった草助は、見るも気の毒な落ち込みよう。

草助はしばらく耐えていたが、急に原稿をかき集めると、

草助 ……ありがとうございます。 (と、去りかける)

涼月 待て！

草助 ……？

涼月 帰れとは言っていない。そこへ座れ。

草助 ……。

涼月 そこへ座れ！

草助 (氣迫に負けて、無念そうに座り込む)

涼月 文章はどこで学んだ？

草助 ……家(うち)の……本……です。

涼月 うむ。独学か……それも、またよかろう。名は？

草助 は、羽生草助といいます。

涼月 うむ。……住み込みは馬場だけだ。いろいろ教えて貰え。今から、お前は加賀美涼月の玄関番だ。

草助 (あっけにとられて見上げている)

涼月 (弟子へ) 君らは、もう今日はいいぞ。(上手へ) お筆さーん！ 風呂です！

とさっさと上手へ入ってしまおう。

初子 (草助へ) おめでとう。よかったじゃありませんか。ねえ。(田熊へ)

田熊 おめでたいのは、あんたのほうだよ。

初子 え？

片桐 またやられましたね。(まねをして)「うむ。お筆さーん！風呂です！」

田熊 (初子へ) いつもこれで逃げられちまうんだ。(片桐へ) また夜にでも出直して来ますよ。ほんとにむずかしいよなあ……大(だい)先生は。

初子 え？ お帰りになるんですの？ 嫌だわ、どうしましょう。田熊さん、ちょっとお待ちになって。(片桐らへ) よろしくお願い致します。

などなど言いながら、二人下手へ去る。草助、改めて三人へ手をついて、頭を掲げる。

草助 どうぞよろしくお願いします。

片桐 こっちもな。あそこが俺たち書生の部屋だ。これが馬場さん。

馬場 おう。よろしくな。

片桐 こっちが友繁。(友繁へ) おめでとう。奴隷解放。

友繁 苦節三年、これで玄関番も卒業だ！(草助の手を取り) ありがとう！後光がさして見えるぜ。

などなど四人紹介しあいながら、部屋へ入る。

しばし、空舞台。

日が暮れかかり、いつしか日暮らしの声ばかりが響いている。

下手から庭づたいに、(従って玄関の鈴はならない) 恋文屋一葉こと前田奈津が、廻り灯籠を手に入ってきて来る。

奈津　　こんにちは……あら、誰もいないの、まあ珍しい。

 下手の書生部屋より、草助が飛び出して来る。

草助　　（気負って）誰ですか！

奈津　　わ、びっくりした。

草助　　どなたですか？　勝手に入られては困ります。

奈津　　どなたですかって、下谷竜泉寺の恋文屋が来たって言えば判りますよ。 ははん、

判った、新しいお弟子さんね。

草助　　（慥然として）新しくても弟子は、弟子です。

奈津　　あ、これ（と、廻り灯籠を差しだし）どっかいい所に掛けといてくださいな。池の
端で夜店が出てましてね、（渡す）涼さんは？

草助　　りょうさん？

奈津　　先生よ。加賀美涼月先生。

草助　　あ、はい、ただいま。

 草助、灯籠を持ったまま、あわてて上手へ入る。

 書生部屋より、片桐、友繁が出て、

友繁　　一葉先生、いらっしやい。

奈津　　こんにちは。

片桐　　先生は行水でもなさっているのじゃないかなあ。

奈津　　ああ、そう、別にいいのよ。ほっておいて頂戴。いつものおしゃべりしに來ただけ
だから。

片桐　　どうぞごゆっくり。私共は、これで。

奈津　　ああそう。あんまり悪いことしてまわらないで、勉強するんですよ。人生は短いわ
よ。

 片桐、友繁「はいはい」「失礼します」など言いつつ下手へ去る。

 扇で風を送りながら庭の鉢植えなど見ている奈津。日暮らしに、上野の鐘
の音。

 上手より、浴衣に着替えた涼月が草助を伴って出る。涼月は奈津の前でだ
けは、青年のように快活である。

涼月　　いやあ、奈津さん。ちょうどよかった、どうぞ、上がって下さいよ。

奈津　　ここの方が少しは涼しいんじゃないかしら。ここでいいわよ。（縁先に腰掛ける）

涼月 そうかい。じゃ、私もそっちへ行こう。(自分で夏座布団を二つ縁先へ運び、草助へ) 麦湯でも、お筆さんにそう言っておくれ。
草助 はい。

灯籠をどこにかけようか迷っていたが、そのまま持って上手へ入る草助。

奈津 (草助の後ろ姿を見ながら) ……いつからなの？

涼月 つい、今し方ですよ。独学だそうだが、実に上手に私の文章を模倣している。しかも、私の世界とは明らかに違う。不思議なものを持っていますね。

奈津 へえー。涼さんが褒めるなんて珍しいじゃない。紅葉先生のところで初めてあった時の涼さんを思い出しますよ。

涼月 私はあんな山出しじゃありませんでしたよ。

奈津 いいえ、入門したてのあなたによく似てるわよ。姉弟子の私が言うんだから間違いないありませんよ。

涼月 (期待を込めて) それより、読んでくれました、『白孔雀』？

奈津 いいわよ、あれ。近ごろのお手柄じゃありませんか。あの白妙って芸者さんが、絵かきの、なんて言いましたっけ。

涼月 香(こう)月(つき)保(たもつ)。

奈津 それぞれ、名前もいいわよ、今回。やっぱり主人公の名前がそこそ良くなくっちゃ、読むほうの心に残りませんものね。その保さんと白妙さんが、心中を決意して伊豆の海へ行くところがあるでしょ。二人の行き場のない心持ちが、会話が明るいだけに、せつなくていいのよ。

涼月 奈津さんにそんなに持ち上げられると不安になってきますね。

奈津 こんなこと言っちゃ、大(だい)作家様に失礼ですけどね、あなた、近頃うまくおなりになったわ。いえ、ほんとうに。

涼月 (まんざらでもなく) 本当？

奈津 心にもないお世辞を使う人は周りに山といらっしやるでしょうけどね、涼さんの小説のことで私は一遍だって嘘を言ったことはありませんよ。
涼月 そうだった。そうだったね。

お筆、麦湯を持って出る。奈津にだけは愛想がいい。草助、まだ灯籠を持ったままうろろう出てくる。

お筆 いらっしやいませ。ちつとはしのぎやすくなりましたね。

奈津 こう、男ばっかりじゃ、暑苦しくてならないでしょ。

お筆 はい。

涼月 (草助を見て) 何をやっているんだ？
草助 あ、これ、あの、どこかに掛けろって……。
奈津 いいんですよ。(縁先を示し) そこいらへんに置いてくれれば。
草助 はあ……。 (置く)
涼月 なんだか埃っぽいね。お前、着替えなんかどうしているんだい？
草助 はあ、これきりです。
涼月 何！(お筆へ) こいつ風呂場へ連れてって、よく洗濯してください！ それで、私の着ないものを出してやって。
お筆 はい。さ、こっちへいらっしやい。
草助 はい……。

草助は、袖の匂いを嗅いだり、はたいたりしながら、お筆について上手へ。
涼月 そっと歩け、そっと！
草助 はい！

草助は先生の遠くを移動して上手へ入る。お筆続く。

奈津 やっぱり涼さんの若いころにそっくりだわ。
涼月 また言う。私はあるに埃っぽくありません……。
奈津 ありましたよ。おっと、これはお弟子さんたちには秘密でしたね。(調子が変わり) そうそう、だけどね、涼さん。あの白妙さんの丸髷、あれはいただけませんね。許されてお式を挙げた仲でもないのに、芸者の丸髷は嫌みですよ。
涼月 あ、あれ？ うーん、やっぱり言われたかあ……。 でもね。
奈津 心中を決意した道行を、せめて新妻らしくってという心なんでしょう？
涼月 はい。
奈津 だったら、もう少し辛抱して、心中をしかけるその時まで丸髷はとっておけばよかったのよ。……小菊ちゃんに……。丸髷結わせたかったんですよ。
涼月 え？
奈津 死んだ小菊ちゃん、言っていましたもの。一度でいいから丸髷結って、涼さんと並んでみたいって。……涼さんの小説にでてくる可哀想な芸者は、みんな小菊ちゃんなんですからねえ。私にはちゃんと判りますよ。
涼月 そうかなあ。もう……。二十年だよ。
奈津 残された涼さんがずっと独り身で通す程、思ってるんだもの。小菊ちゃんも幸せだったのかもしれないねえ……。
涼月 ……そういう訳でもないんだけどねえ。

お筆が蚊遣りを持って出る。隅へ置く。

涼月 （お筆へ） どうしてる？

お筆 意地になって身体中こすってます。

お筆、廻り灯籠に灯を入れる。

涼月 ちょっと、上がって下さいよ。さ、上って。（書斎の電灯をつけてもよい）一人で

机に向かっていると、同じところを堂々巡りしてしまう。奈津さんと話していると、もつれた糸がほどけるように思えるんですよ。

奈津 （上がり） 恋文屋風情でお役に立てれば、光栄至極。

涼月 ところで、その心がうまくいかなかった理由なんですかね……。

奈津 悲しい終わり方はだめですよ。どんなに苦労しても最後の最後は必ず二人を結ばせてくださいよ。あなたと小菊ちゃんみたいに死に別れなんてとんでもないですからね。

涼月 奈津さんはいつもそう言うけどね、小説なんでものはやっぱりね……。

奈津 だめですよ、別れっぱなしじゃ。……（などなど）

下書きの原稿を広げて、顔を寄せ、熱っぽく話し始める涼月と奈津。廻り灯籠の傍らで、そんな二人をほほえましく見ているお筆。

舞台も廻り始めて道具替わり。

第二場 吉原江戸町の小店・大黒屋の二階広間

平舞台の座敷。

正面二間に障子が入り、その外は廊下。出て、下へ行くと階下、上手へ行くくと各々の女郎の部屋へ通じる心。外は中庭を隔てた隣家。下手褌の襖は、隣の部屋や勝手、女中部屋へ通ず。上手褌に簡単な床の間。全体に艶めいて、かつ、やや古ぼけた印象。以前の繁盛と現在の衰運がほの見えている。

「引き付けの間」というよりも、現在は酒席などにたまに使われるだけのただの座敷といった感じ。丸窓、衝立、火鉢、蓑盆、膳、雲盤など適宜。

前場の一か月ほどの後の夜。

上手よりに加賀美の弟子、片桐、草助、馬場、友繁が座り、そのとなりに
女郎の梅春。下手よりに芸者の小虎、しめ子、大(だい)吉(きち)、鈴弥。
というのが基本的な居所だが、今は酒もかなりまわり、三味線と太鼓と歌
と踊り。どたばたしたまま回ってくる。

歌 「はいからソング」(芸者と弟子たちと梅春)

一同 いやだいやだよハイカラさんはいやだ 頭の真ん中にさざえの壺焼き なんて間
がいいんでしょ

島田くずしでハイカラさんに結って あなたの側で算盤パチパチ なんて間が
いいんでしょ

酒は正宗芸者は小虎 唄は流行の間がいいソング なんて間がいいんでしょ

ひとしきり騒いで、落ち着く。

片桐 どうだ草助、華の吉原は気に入ったか。

草助 (一人頑(かたく)なな感じを崩さない) ……はあ。

片桐 おい小虎。お気に召さないとよ。お前さんの所(せ)以(い)だぞ。

草助 (あわてて)いや、そんなことはありませんよ。愉快です。愉快です。あはは……。

小虎 (草助に酒を注(つ)ぎに動き)あら、お楽しみですよねえ。吉原で一二を競う芸自
慢にさんざ踊らせて、それでお気に召さないんじゃ、私たちがあんまり可哀想とい
うものですよ。(一同へ)ねえ。(草助へ注ぐ)

草助 おそれいます。

片桐 芸者におそれいるなよ。

梅春 まじめなんですわねえ、本当に。

片桐 (手を叩きながら呼びかける) お酒、お酒。おばさーん。花魁はまだなのかい？

仲居のお常が下手より出る。ややあって、遣り手のお豆が続く。

お常 はいはい。お酒でございますか。ただ今。

お豆 お客さん。花魁衆は芸者じゃないんですから、こう飲んで騒いでいるだけでしたら、
お出ししても仕様がなないんじゃありませんか？

片桐 みなまで言うな。そこはそれ。(と、手早く金を渡す)

お豆 (豹変し)さいですか。おそれいます。いえ、実はちょうど支度ができたところ
だったんですよ。ええ、すぐに参りますから。はい。

お豆、正面へ去る。お常は、空いた銚子を集めて入る。

片桐 草助。人間万事金の世の中という図だ。先生の描く花柳紅燈の巷が、実相とおよそ掛け離れていることを、しっかり見とけよ。

馬場 (酒に弱くすでに酔い潰れていたが) そのとおりれす！

三味線をもって桃太郎が正面から飛び込んでくる。

桃太郎 こんばんは。

小虎 桃ちゃん。なにしてたのよ。

桃太郎 ごめんなさい。三味線破いちゃって、取りにもどったもんですから。

大吉 そんなこと、源さんにでも頼めばいいのに。

桃太郎 どうもすいませんでした。

片桐 もうちよつとこっちへおいでよ。草助、お前(下手を指し)あっちのほうへ移動しろ。

草助 はい。(と、お膳を持って立ち上がる)

桃太郎 あら、いいんですよ、私なんかは。どうぞそのままにしてらしてくださいな。

草助 でも、俺、気がきかないから、先輩の隣に座ってさしあげてください。俺は、あっちでいんだ。(少し訛るのである。下手へ移る)

片桐 そんだ。あとでたつぷりいい思わせってやつから。(桃太郎へ)そんなに気を使うことはないよ。入って一(ひと)月しかたっていない玄関番なんだから。

桃太郎 玄関番でも華族様でも、お客様はお客様。第一、仕事に上も下も、尊いも卑しいもないじゃありませんか。

友繁 福沢諭吉みたいなこと言う芸者ですねえ。

小虎 ごめんなさい。桃ちゃんたら、思っていることをそのまま口に出しちゃうんだから。

しめ子 あたしたちも心配してるんですよ、いつも。

桃太郎 (明るく) すみません。

障子が開いて、お豆が顔を出す。

お豆 お待たせしました。此花花魁でございます。

お職の此(この)花(はな)が艶(あで)やかに入ってくる。

友繁 いや、お待ちかね。

此花 遅くなりました。

此花が、上手の片桐の隣のほうへ行くので、桃太郎は下手へ移る。お豆は下手へ入る。

片桐 あれ？ 桃太郎……(床の間を背にしていることに気づき)あ、そうか、どっこい、

今夜はそうじゃねえんだ。花魁ごめんよ。(自分の盃をもって立ち、草助の方へ行きながら)俺がそっちで、お前が、あっちだ。(と上座を示す)

梅春 その書生さんが、此花さんの？

友繁 今晚のお正(しょう)客(きゃく)は草助くんだ。

片桐 古式ゆかしい吉原の風情を味あわせてやつかねえと、加賀美門下として恥ずかしいからな。

草助 (腰がすわらず)片桐さん、……俺、困りますよ。それに、ここ(高いんでしよう?)……。

片桐 いいってことよ。今日は手慰みのほうも、目と出ているんだ。

草助 何ですか、「目」って？

小虎 ま、うぶな方。(サイコロを振るまねをして)丁！ 半！ これですよ。

片桐 馬場さんの御指南のお陰ですよ！

(ぐずぐず)ばくちはだめよお、だめれすう……！

馬場 馬場さんは、「打つ」のはお上手でも、こっち(飲む)の方はからきしなのね。

そのとおりれす……。

友繁 (盃を上げて)片桐先輩、いただきまーす、梅春飲もう！

梅春 はーい！

花魁。いろはのいの字から、恋の手習い、頼みましたよ。

草助 ええ！ その……これは……(立って、片桐を前のほうへひっぱる)後学の為に、廓の作法を、見るだけだって。

片桐 ここまで来て、見るだけじゃ、それは失礼つてもんだぞ、おまえ。(冷笑して草助のいた桃太郎の隣に座る)

草助 だからって……俺はまだ修行中の身の上です。先生の禁じられたことを破るわけにはまいません。

友繁 先生だって、別に女郎買いをいましめられているわけじゃありませんよ。ただ、たっぴらに博打、芸者遊びをするな、って。(馬場へ)ねえ。

(何か叫んでいるが、何を言っているのだか)……。

馬場 芸者だっているじゃありませんか！

片桐 (苦り切って。此花へ)花魁、こういうの慣れてるんだろ？

此花 (優しく)お客さん、そう、ここを悪所とばかり決めつけないでもいいんじゃない

ませんか？

草助 いや、そんなつもりで言ったのではないんです。

此花 先生とおっしゃる方のお言い付けは、お言い付け。お約束をたがえまいとなさるお心持ちは、男らしくて私は好きですけれども……どうでしょう。私の部屋へおいでになるもよし、ならぬもよし、それもこれもあなたのお心持ち次第。ただ私たちも大門をくぐった殿方に、つまらない思いをさせて帰すのだけは、辛うござんすから、ここでもう少し、お相手をさせてみてはくださいませんか。吉原の女や芸者衆の心根をこれだけで決められては悲しゅうござんす。

草助 は……はい。(手をつき)皆さんに嫌な気持ちにさせてしまったら、ごめんなさい。謝ります。

小虎 あらま、素直な方ねえ。

桃太郎 (側へ行き)いいんですよ。男の方が、そんなにぺこ頭を下げるものじゃありませんよ。

草助 はい。(頭を下げる)

桃太郎 ほら、また。(立たせて此花の隣へ座らせる)花魁、いい方ですね、この人。

此花 ほんとに、いい男。

二人の花に見つめられ、草助、酒を煽る。お常は、この間に新しい銚子を
持って出て、それぞれに置いて、入る。

片桐 (小虎へ)後輩のために身銭切って、こっちはとんだ仇役だ。

小虎 この小虎姐さんの目はごまかせませんよ。

片桐 え？

小虎 (桃太郎を見て)いけませんよ。吉原芸者は芸は売っても色は売らないのがしきたりなんですからね。

片桐 そんなこと言ってるから他所に客を取られちまうんだよ。

桃太郎 (それまで草助と話していたが、明るい笑い声を上げる)えー？ 川越なんですか？ 知ってる知ってる。お芋がおいしいんですよ。家(うち)の方へも焼き芋屋さんが来ますもの。大きく、「かわごえ」って書いてあるの。

鈴弥 あ、来る来る、その焼き芋屋！

梅春と鈴弥 おいしいよねえ。

草助 (上機嫌)「九里よりうまい十三里」って奴でしょ。でも東京の焼き芋は、ほとんどが千葉のほうのものですよ。川越のものは、とれるのが遅いから、冬場は間に合わないんです。うまいですよ。

片桐 (呆れて)何話してんのかねえ、廓に上がって、芋だだよ。草助、吉原の情(なさけ)がちつとは身に染みて来たのか。

草助 ……はい。

片桐 先生だって、男だ。たまにはお忍びでいらっしやる。ただ若い妓(こ)と派手に遊ぶのが、嫌いなだけさ。そう杓子定規に考えなくていいってことよ。

草助 しかし……私はまだ修行の身ですし、やはり……。

片桐 これが修行でなくて何が修行だ。俺だってこんなこと好きでやってんじゃねえぞ。嘘ばっかり。

小虎 嘘でえす。

片桐 北村透谷だって言っていましたよ。「恋愛ありて後、人生あり」ってね。

友繁 (草助へ)お前は恋愛もないんだから、人生もないの。その前の前ってことだよ！

片桐 (立ち上がって)そりゃ、俺は人生も、恋愛も、みんな知りませんよ。……ですが……。

草助 女も知らないんだろう？

片桐 (絶句。悲痛に)女を知らなきゃ、そんなに小説って書けないんですか？ 俺には、小説を書く資格がそんなにありませんか。

草助 ああ、ないね。

片桐 (食いつくように)片桐さん！ そりゃあ俺は、川越の百姓の息子です。先輩方のように……家が裕福で……親も後押しして、色里で芝居の二枚目みたいな遊びには縁もなければ、……洒落や……流麗な文章も書けません。ですが、これが本当の修行だからって、……俺、こういうの、……。

片桐 (盃の中身を草助の顔にかける)

一同、はっとする。

草助 ……。

片桐 いい加減、物を弁(わきま)えて口をきけよ。右も左も判らねえ、お前のようなひよっ子を無理やり預けられた俺たちの身にもなってみろ！ それを、何だ？ 言うに事欠いて、家(いえ)が裕福で、芝居の二枚目だと？ 手前の手を見てみる！ 節くれだって、短けえ指をよ。その芋を掘る手で、色だの恋だの書こうってのか、よくよく頭冷やして考えやがれ！ この大間抜け！

草助 ……。

桃太郎 ちょっと待ってくださいよ。そんなおっしゃりようってないんじゃないですか？ 百姓には小説ってものが書けないんですか？ 私はしがたない宮大工の娘で、学もないし、世間も広くはありません。でもね、小説ってものが、本当に世の中に入り用なものなら、それは、誰彼のへだてなく、人の心を打つからあるんじゃないんですか？ 大工が家を建てるように、精魂込めて書くんでしょう？ だったら、いいじゃありませんか。一生懸命、手間暇かけて、おいしいお芋みたいな小説作れば。

この人に書けないで、遊び上手なあなた方にしか書けないものなんて、それ、どっかが間違ってると思います。変ですよ。そんなのはきつと間違ってると思います。

気まずい沈黙が流れ、一同興が冷める。小虎たち、はらはらしている。と、お豆が顔を出し、

お豆　そろそろお開きにしちゃいただけませんかねえ。ここは料理屋じゃないんですから……。

小虎　あいよ、おばさん。合点、合点。

此花　(草助を起こして) さあ、あなた。

大吉　(わざと明るく) お立ーちー。

一同、立ちかかる。桃太郎一人、じつと一点を見つめて座っている。

此花と正面を出かけた草助、ふらふらと桃太郎のほうへ戻り、桃太郎の横顔をうっとり眺めたまま座る。

草助　俺、……この人がいいや。

びっくりして振り向く桃太郎。にっこりとした草助。呆れる一同。
道具替わり。

第三場　下谷竜泉寺町・奈津の店と住居

舞台は路地に面した長屋の一画といった感じ。下手、腰高障子の出入り。入った三和土(たたき)は、そのまま小さな荒物や駄菓子を商う店先となっている。正面の棚や、狭い板敷きの上に、所せましと雑多な商品が並んでいる。紙類や紐などは吊るしてある。勝手へ通じる暖簾口。

中央の座敷が、奈津の代書などをする仕事場兼居間である。濡れ縁。正面に押し入れ。茶箆筒や本箱。火鉢。茶櫃など。

上手に続いたもう一部屋は、奈津の寝るところ。衣裳箆筒、鏡台、仏壇など。着物が掛けてあり、人形など女らしい小物が細(こま)々(こま)と飾つ

である。熊手、お札(ふだ)など縁起物多数。

店先の軒には「手紙かき□(※□の中に／を加えた慣用文字でお願いします) 恋文屋」と墨書した木の看板がかかっている。下町らしく、家の内外に様々な季節の花をつけた鉢植えなどが並ぶ。

同年、十月中旬の、晴れた昼。

明るくなると、中央の部屋で仕事机に向かって手紙を代筆している奈津。その下手隣に、普段着に半纏を着た吉原の花魁、萬年屋の左京。自前なので、一人で頼みに来ている。

店先の狭い板の間で、近所の少女おたみが、黙々と習字をしている。入り口は、開け放したまま。

歌② 「あらあらかしこ」 (奈津)

おとうさん

ゆきはとけましたか

はるはまだですか

わたしはたっしや

あんじることはありません

このつぎは

もう少したくさん

おかねおくります

からだ大事に

あらあらかしこ娘より

手紙を書けないあなたのために

手紙を読めないだれかのために

あなたにかわって わたしは 書く

こころのありたけと すこしのうそ

ものがたりを書くように

でも小説とはちがう

ただひとりの あなたのために

せかいにひとつの ものがたり

せかいにひとつ あなただけの ものがたり

奈津 (宛て名を書き上げた手紙を封筒に入れ)……これでよし。切手もちゃんと私の方で貼って出しておいてあげるから心配しなさんなよ。

左京 (少し訛りがある) 何かから何まで、ありがとうございますました。

奈津 まとめてくから、月(つき)末(ずえ)でいいわよ。(帳面へ) 萬年屋の左京さん、ちょいちよい、と。

左京 私、自前だから、こうやって一人で先生のところには来られても、青森までは帰らせてもらえませんかねえ。

奈津 ここで、あんたまで気を滅入らせちゃいけないよ。倒れたお父つつあんも、あんたの身体のことを一番心配してるって書いてあったじゃないの。言いたいことは、ちゃんと書いといたから、大丈夫、気を大きく持つてお励みよ。

左京 ありがとうございますました。

奈津 返事が来たらすぐお知らせよ。読んで上げるからね。

左京 はい……。ありがとうございますました。

奈津 おたみちゃん、花魁にそののべ紙(がみ)をね、ひとつ持つてってもらってね。はい。(吊つてある懐紙を渡す)

左京 こんなことまでしていただいて、先生……。

奈津 いいのよ、いいのよ。

左京 じゃ……。甘えます。ごめんなさい。

何遍も礼をいいながら下手へ去る左京。

入れ違いに、黄菊の鉢を持った、近所の鰯(かぎり)職の老人、浅吉が入ってくる。眼鏡を外しそこいらに置き、凝った肩を廻したりしている奈津。

浅吉 ごめんなさいよ。

たみ おじいちゃん。

奈津 あら、浅吉さん、今日は。

浅吉 いつもおたみの奴がありがとうございます。ちょうど、咲き始めたのを見つけたましたんで。どうぞ。(縁先へ置く)

奈津 嫌だわ、また。お礼を言わなきゃならないのはこっちの方ですよ。いつも、お店のほうはおたみちゃんに任せつきりなんですから。

浅吉 父親に甲斐性があれば、ちゃんと学校へやれるんですがねえ。

たみ (習字を見せて) 見て、これ。(「義経」と書いてある) 先生に教えてもらったの。

浅吉 ほう……。 (読めない) えーと、それは?

たみ 「よしつね」。

浅吉 九郎判(ほう)官(がん)の? へえー。(心より感心する)

たみ うん。学校なんか行かなくなつて平気よ。(また習字を始める)

顔を見合わせる奈津と浅吉。
芸者の小虎が普段着で現れる。

小虎 今日ほ。

たみ いらっしやい。

小虎 (浅吉へ会釈する) どうも。

奈津 ああ、姐さん。構いませんよ、どうぞ上がってくださいな。

たみ (小虎へ) おじいちゃんなの。

小虎 あらまあ、それは失礼をいたしました。

浅吉 いつも孫めがお世話になっております。

小虎 いいえ、どっちがお世話になってるか判りやしませんよ。(おたみの粗末な装(なり)

には少し不釣り合いな赤い簪に触れ) あら、可愛いわねえ。

たみ お爺ちゃんが作ってくれたの。

小虎 へえ、幾つになってもこういうのって、差してみたいねえ。

奈津 本当だね。

浅吉 では、私はこれで……。

奈津 まあ、いつも恐れ入ります。(たみへ) あんたちちょっと遊んで来ていいわよ。

たみ でも……。

奈津 だいたい子供のくせに働き過ぎですよ。

たみ はい。

浅吉 ごめんなさい。

たみ、浅吉と連れ立って下手へ去る。

小虎 相変わらずの人助けだねえ。こんなんで商いになつてんのかい？

奈津 まあね。姐さんこそ今日のお相手は？

小虎 (照れくさそうに) へへ……。

奈津 御祝儀のお礼？ 病気見舞い？ 入営祝い、借金の言い訳？ 借金のとりたて？

……じゃ、男と女の結びの神。

小虎 (照れて頷く)

奈津 よろず手紙にかかわる代読代筆、おまかせなさい、おまかせなさい、恋文屋一葉、かしこみかしこみ申す。てなもんでね。で、お相手は？

小虎 目白のお医者さん……と陸軍の中尉さん。

奈津 両方一遍に？

小虎 うん。

奈津 まあ、しょうがないねえ。便箋がいい？ 巻紙？

小虎 そりゃ、巻紙にさらさらだよ。金(かな)釘(くぎ)流(りゅう)の葉書ならあたしにだって書けるもの。

奈津 (慣れた手際で籠(かご)のなかから巻紙や封筒、切手などを出しつつ)封筒は？ 桔梗、萩女郎花。透かしの入ったものもあるわよ。中身は、ちょっと変えるだけでいいわね。

小虎 えー。

奈津 だって、男二人が見せっこする訳ないじゃないの。

小虎 そりゃ、そうね。なるべく、たよたよとして、はかなげな風情の字で、男の人が支えていないと、秋風に持って行かれてしまいそうな感じで。早く私を苦界から救い出して下さいまし……って、まあ、ばれないくらいのところでいいけど、おいしくおまけして作っておくれよ。

奈津 お鮎握(あなづか)ってるんじゃないんですからねえ。……あれ、眼鏡どこやったんだろう？ ……ちよっと待って下さいよ。眼鏡、眼鏡と……。

小虎 また？ 首からぶらさげとけばいいんだよ。

奈津 やめてよ、金貸(かんだ)しの婆(ばあ)あよ、それじゃ。(簞笥(だんす)の上や仏壇(ぶつだん)の辺(へり)を捜(さが)しながら、ちよっと、昔(むかし)に思いを馳(は)せ)……はかなげな風情(ふうせい)か、そんな人がいたわねえ。そう、か細(こほ)くてねえ、ひよろひよろつとして、ほうっておいたら秋風(あきかぜ)にもっていかれそうなの……。いつか、話(わ)したでしょ、きくちゃんて仲良(なつ)しだった芸者(げいしや)さんのこと。

小虎 (仏壇(ぶつだん)の中に写真(しやしん)を取り出し)この、小菊(こぎく)ちゃんって子(こ)だね。あらあ、可愛いねえ……。

奈津 でしょう？ ……そりゃあ汚(けが)れのない、きれいな恋(こい)をしました。あんな清(きよ)らかな恋(こい)は、いまじゃ丸(まる)つきりお目(め)にかかれなくなりましたねえ……。 (氣(き)を変(か)え) おーい、一葉(いちよう)先生の眼鏡(めがね)やーい……。

子供の歌声(うたごゑ)が遠く聞(き)こえている。

揚幕(やまぐ)より、信玄袋(しんげんぶくろ)と籐籠(とうろう)を持(も)ったきく——先の芸者(げいしや)小菊(こぎく)が、あたりを見回(みまわ)しながら歩いてくる。銘仙(めいせん)だが、どこか土臭(どろくさ)く、垢(か)抜け(ぬ)けない。が、かなり元氣(げんき)そうな中年(ちゆうねん)となっている。

郵便配達夫(ゆうびん配達夫)が通(と)る。

きく ……あの……。

配達夫(配達夫) はい。

きく 恋文屋(こいぶんや)さんという先生(せんせい)のお宅(たく)はどこらでございます？

配達夫(配達夫) 恋文屋(こいぶんや)？ ……ああ、手紙(てがみ)の代書屋(だいしょや)さんのなら、そこですよ。看板(かんばん)が出ていますからすぐ判(わか)りますよ。

きく あ、ああ、あれね。ありがと……。

配達夫は、構わず向こうへ行っている。

きくは、軒下の看板を確認して、愁眉を開く。

きく (おずおずと) あのー、ごめんなさい。あのー、恋文屋一葉先生のお宅はこちらでございましょうか。

奈津 (眼鏡を捜しながら) はい、うちでございますよ。

きく まことに不(ぶ)躰(しつけ)ではございますが、吉原の角(すみ)町(ちょう)にありました、松(まつ)ケ(が)枝(え)という置屋に縁のある者なんです、ちょっと先生にお目にかかりたいと存じまして参りました。

奈津 ……松ケ枝? (写真を指し) この人のいたところよ。はあ、はあ、どうぞ。

小虎 (迎えに立って) さ、どうぞ、どうぞ。

きく (入って来て) ……一葉先生ですか?

小虎 (手を振って) 恋文屋一葉先生はこちらですよ。(と、自分は上手へ回る)

奈津 はい。どのようなことございましょう。

きく はい、あのー、折り入って先生にご相談したいことがございまして、私、羽(は)に(生(ゆう)と申します。ほんとに失礼なんですが……。今およろしいんですか……。?

この間、きくは頭を下げて、ほんの少し訛りながら話しているが、ちょっと顔をあげて奈津と目が合うと、「どうも、どこかで見覚えのある……」
と考えている。

奈津 (妙な間に、「?」。小虎を見て) ああ、この人はいいんですよ、後(あと)でも、ねえ。

小虎 え、ええ。どうぞどうぞ。

きく すみません。

奈津 で、どのようなお訪ねでございましょうか。

きく (顔を上げて、じっと見つめる)

奈津 ……な、なんです? (小虎へ振り向き) 顔になんかついてる?

小虎 ううん。

きく ……やっぱり、そうだ。(胸が迫って) う、う、ううう……。

奈津 (不気味) え? な、なんです。どうしたんですか? (小虎へ) どっか、悪いんじゃないかい、この人。

小虎 おばさん、大丈夫かい? 一葉先生に何か御用なのかい?

きく 一葉せんせいって、その、やっぱり、「一葉せんせい」?

小虎 なに言ってんだか、このおばさん。一葉先生は、一葉先生に決まってるじゃないか！一葉先生じゃ具合の悪いことでもあんのかい！先生に文句があるんなら、この小虎姐さんが承るから、言って御覧！

奈津 (小虎へ) 乱暴しちゃだめだよ。

小虎 また、鼻緒とかの押し売りじゃないのかい？こういうのは、私に任せておおきよ。

奈津 (小虎を押え、きくへ) ああ、一葉というのは、ここいらの人がそう呼んでくれるだけなんですけどね。本当は、前田っていうんですよ……。

きく ……まえた……下は、なつ？

奈津 ええ、まあ、奈津ですけど……。

きく なっちゃん！

いきなり奈津に抱き着こうとするきく。跳んで後へ逃げる奈津。

奈津 きゃー！なんだよ、このおばさん！（小虎へすがる）

小虎 ちよつと、あんた！どういうつもりなんだい？

きく あ、ああ、ごめんなさい！でも、あの、その人、なっちゃんですよね！

小虎 え？ええ、まあ、奈津ちゃんはどうしたって。

奈津 ちよつと待って……その声。どっかで聞いたことが、ある。

きく そりゃそうよ。きく、です！

奈津 きく？

きく そうよ！私よ、私よ。吉原で芸者に出た、ほら、小菊！こぎく！……声が低くなってるのかなあ。二十年前は、もうちよつと高かったかしら（ちよつとキーを上げて）私よ。私、きくです。きく。

奈津 その声……えええ？きくちゃん？（顔をぐつと近づけてまじまじ見る）

きく (ぐつと顔を出し) そうよ。小菊です……！

奈津 え？ ええ？

きく (頷く) きくよ！……私、小菊よ！

至近距離で、まじまじと見詰め合う二人。

やがて奈津はずると後じさり、やつと立って仏壇へたどり着き、さつ

きの写真を取り出す。

が、よく見えない。小虎が、ようやく奈津の眼鏡を発見。奈津へ渡す。写真と実物と見比べる奈津。一緒になって、小虎も。

奈津 (眼鏡を掛けて、しつかりきくを見る) ……あらあ。……ほんとに、きくちゃんだ

……。

きく そんなにびっくりしないで。元気そうだね。懐かしい。嬉しい、また会えるなんてね。

奈津 ……どうして……？

きく どうしてって……あれから一度も東京になんか出て来なかったんだもの。

奈津 あんた、死んだんじゃないの？

きく 私が？……死んだ？……どういうこと？

奈津 川越へ嫁いで、しばらくして病みついたらすぐ死んじゃったって……。

きく ええ！

奈津 (写真を見せ) だって、ほら、あんた(仏壇を指し) あそこに入ってたんだもん、あんた。

きく やだ、どうしてよ。私、生きてるじゃない、ほら。

奈津 そりゃ、そうよね。本人が言うんだもの……なんで、あんた……そうならそうと言っといってくれば……こんな……ねえ……まあ……。

きく でも、嬉しいわ、一葉先生ってなっちゃんのことだったの……そう……。

奈津 きくちゃん……！生きてたのねえ……！(泣く)

きく 生きているわよお……。(泣く)

二人とも、情が迫って、涙に言葉を消されてしまう。

手を取り合い、たまらず声を上げて泣く。なんとなく貫い泣きする小虎。

やがて驚きが喜びに変わる二人。

きく (涙と鼻水をぬぐいながら) ……でも、どうして私が死んだなんて……。

奈津 どうしてって。あ、そうよ、手紙よ、手紙。

きく 手紙？

奈津 そう、松ケ枝のおかみさんのところに、小菊は急な病で死んだって、その、あんたのお舅さんから手紙が来たのよ。東京を離れてすぐだったよ。

きく ……そう。(思いに沈む) お義父さんが……。

奈津 そうそう、せめてお線香でもって、手紙でうかがったら、それには及ばないって、つっけんどんな返事が来て、私たちも松ケ枝でお酒だけのお用いをしたんだっけ。ごめんなさいねえ、そんなことがあったんだ。

奈津 ……上手な嘘だったわねえ。みんなすっかり信じちゃったもの。

小虎 あの……、こっちへお上がりになったらいかがです。つもる話もあるでしょうから。奈津 そうよね。こっち来て。散らかってるけど。もう、何から話したらいいのかしらねえ。あんまりびっくりしたもんだから。

きく ……もう二十……一年になるべなあ。(しばしば訛りが出る)

きく、上がる。小虎は、周りを片付け、座布団を出し、茶の支度をする。
奈津はつくづくときくを見て、

奈津 ……それにしても、あんた、変わったわねえ。ほんとうにきくちゃん？ 贗物じゃないの？

きく え？なあに、それ。どうして？

奈津 (まじまじ見廻し) え……って、その、なんか、大きくなった……。

きく ほんと？

奈津 ……うん。

きく ああ、あの頃に比べたら、少しは太ったかもしれないわ。

奈津 少しじゃない……。

きく そんなに？

奈津 倍くらい……大きくなった感じ。

きく そうかしら。自分じゃ、よく判らないのよね、そういうことって。小菊じゃなくて、

大菊ってこと？ (笑う)

奈津 (笑えない)

きく そんなに……。 (ちよつと落ち込む) そりゃあ、あの頃と比べたらなあ……ただの

田舎の百姓婆あかな。

奈津 いや、そんなことないわよ。きつと、私も変わってるだろうし。だいぶ歳とったし。

きく なっちゃんは、変わってないわねえ。だけど、目は大分悪くなったみたいだねえ。

奈津 ごめんなさいね。ほんとに眼鏡がないと、あんたの顔だつてうで卵みたいにか見え

えないもんだから。

きく やっぱり小説、頑張っているんだね。そうかあ、先生だものねえ。一葉せんせい

て、あの樋口一葉と同じ名前なの。

奈津 え？ああ、それはね、それは、仇名(あだな)。小説なんか、とつくに諦めて、今

は、ここいらの代書屋よ。荒物屋をかねての代筆屋さん。

きく ああ、(店の様子など見廻しながら) そう……へえ、小説は諦めたんだ……。あんな

な上手だったのにね、ものを書くのが。へえ……。

奈津 私の方より、きくちゃん、あんた、どうして？

きく ああ、そうね。嫁ぎ先が代々の百姓で。二十一年間、一所懸命芋ばかり作ってた。

亭主が朝鮮ですぐ死んじゃったもんだからね、舅姑かかえて、這いつくばって働いたわ。

帰るところもなかったし、どうせ、涼さんと別れたとき、一度は死んだ気にな

って死んだから。義父さんたら、焼けぼっくに火がつかないようになって、本

当に死んだつてことにして、そんな手紙を出していたんだねえ。

奈津 ……でもよく。私がここにいるって判ったわね。

きく いえね、松ケ枝さんもなくなってしまうってし、ふた昔も前のことですよ。方々聞

いて廻ったら、文士の事なら竜泉寺の恋文屋の先生が詳しいからって。……でも、まさか、それがなっちゃんとはねえ。

奈津 文士の事って？

きく そうだわ。なっちゃんだったら、力になってくれるわ。きつと、そうよ。ねえ、あんた近ごろ、……涼さんに会うことある。

奈津 (不意をつかれた思いで、どきりとする) え？ 涼さんって、あの涼さん？

きく 涼さんっていったら、涼さんに決まってるじゃない。ああ、今じゃ、加賀美涼月先生か。

奈津 ……あんた。涼さんに……会いに来たの？

きく (首を振る) 会える訳ないじゃない！一生会わないって、固く約束して別れたんですもの、涼さんにも、紅葉先生にも、……。

奈津 ……そうよね。

小虎が、お茶を出すきっかけを捜していたが、話を聞いていたのだ。きがそれに気づいたので、

小虎 あ、あの、私は、すぐお暇しますから、ええ。

奈津 この人は平気ですよ。あんたと同じ吉原の芸者さんなんですから。

きく (曖昧に微笑んで) ……実は、息子がね……、一人息子なんですけど、……一月くらい前に家出しちゃってね。小説家になるんだって。

奈津 小説家？

きく うん。それが手紙よこして、よりによって涼さんのところで住み込みのお弟子さんしてるって言うのよ。

奈津 涼さんの、住み込み？……ええ！

きく 小説家になるなんて馬鹿な考え捨てさせて、何とか川越に連れて帰りたいんだ。
奈津 (思い当たる) あの子……。

愕然とする、奈津。

きく 私が出て行く訳にはいかないんだもの。ねえ、なっちゃん。なんとかならないかしら……。

小虎 力を貸しておやりなさいよ、奈津さん。これも人助けだ。

奈津の肩なんか叩いたりして、無責任に励ます小虎。

奈津 あんたの子が、涼さんのお弟子さんに……。

動揺を隠して、きくを見返る奈津。
道具、替わり。

第四場 加賀美邸

前場に続く夜。十三夜の美しい月の夜。

掛け軸、額、座布団、鉢植えなどが夏のものとは変わっている。縁の中央あたりに、月見のお飾り。団子、秋草、酒などがそなえてある。

上手の座卓で、涼月が執筆中、下手前の小机では、草助が小説を筆写している。

暫く、無言のまま机に向かっている二人。

虫の声だけが響いている静かな晩。

涼月 (静かに) ……どうだ、筆写は飽きたか。

草助 (見透かされているようで、首をすくめる) いえ……。

涼月 右から左へ書き写すだけの作業だ。疑問は持たんか？

草助 文字も手本を真似ることから始めます。文章も先人の名文を模倣することからと、そう理解しております。

涼月 うむ。独学の所以か、お前のものは、誤った言葉遣いが目立つからな。私は、新しい小説を生み出そうと、肉を裂き、骨を削って苦闘して来た先輩の心意気を、頭で

はなくその指で、その心で感じて欲しいと思っっているのだよ。

草助 はい。

涼月 奈津さんだって、……あの恋文屋のね。あれでなかなかの才能だったのだが、死んだ樋口一葉の鬼気迫る仕事ぶりを目のあたりにして、自分の小説は所詮お嬢様芸だと、筆を折ってしまった。判るか？ なまじの才能や努力だけでは通用しない世界なのだ。……で、今は？

草助 「多情多恨」です。

涼月 うむ、紅葉先生、畢生の傑作だな。しかし、あと五十年もすれば、先生のお作も私らのものも、顧みられなくなっているのかもしれないな。

草助 どうしてそのようなことをおっしゃるんですか。

涼月 時代は、乗り方の心得もない者にいきなり鞭を入れられた馬のように走りだしている。私らは振り落とされまいと、たてがみにしがみついただけで精一杯だ。……日清日露の戦勝、揚句の果ての、この夏の朝鮮合併で、この国の人間はおよそ「分（ぶん）」というものを忘れてしまった。見てみたまえ。まるで、背負った荷物が重すぎて、立ち上がれないでじたばたしている丁稚小僧だ。今の文学界も同じだ。やれ「自然主義」だ「ゾライズム」だと、やはり重すぎる荷物に立ち上がれずにいる。どうかして、我々の桁丈に合った、人生の喜怒哀楽を存分に味わえるものが、君たちの代に生まれてくることを期待するよ。

草助 我々の、桁丈に合った文学ですか。……先生！ 俺は、うまく言えませんが、……今までに一番心を動かされたのは、先生の小説です。作品の中の人間と一緒に、泣いたり、笑ったり、心底怒ったり出来たのは先生の作品でした。だから、俺は、だれが何と言おうと先生の小説が、好きです。……だから……、

涼月 （歩きながら）私はしがない通俗作家だ。が、「俗の中に風流あり」だ。私は私を必要としてくれる、愚かしくも慎ましい日本人のために小説を書き続けるさ。

草助 ……今夜は……いつもの先生らしくありませんね。
涼月 （笑って）そうか。（少し照れて）うむ。やはり、迷いが出るか……。草助の手元の原稿を見ていたが）なんだ、一行とんでるじゃないか。
草助 え？ は、はい。

涼月 ここ二、三日、どうも字が浮ついとるな。故郷（くに）が恋しいか。
草助 いえ、そんなことは、全くありません。

涼月 お母上のが気にかかっているのではないか？

草助 いいえ。あの人は、大丈夫ですから。

涼月 「あの人はいかな。君を生んでくれた方なのだから。

草助 はあ。

涼月 どんなお方なのだとえて御覧。

草助 え？母ですか……うーん、強い人で……どちらかという……、猪みたいな……。

涼月 お前、もう少し語彙（ごい）増やしなさい。

草助 はい。

涼月 （思いついて）少し調べ物をする。

草助 はい。

涼月 （行きかけて）あ。色恋に迷うには早すぎるな。芸者だけはいかんど。

草助 （ぎく！）

涼月 気合を入れろ！

草助 はい！

と、書庫へ入って行く。嘆息する草助。

虫の声。庭づたいに、下手より、そっと奈津が入ってくる。

草助 あ、恋文屋さん。

奈津 (唇に指を当てて制す) こっち、こっちへいらっしやいよ。いいから。

草助 今、調べ物をなさっていらっしやいますか……。

奈津 あ、そう。丁度いいわ。こっちへいらっしやい、こっちへ。早く。

草助、呼ばれるままに庭へ降りる。

草助 どうしたんです、先生なら書庫です。

奈津 涼さんなんかいいんですよ。今日はあなたに話があってきたんだから。

草助 僕に？

奈津 そうなのよ。(まじまじと見て) ちょっと、そっち向いて。ぐるっと、廻ってみて。

……似てないわねえ。かつがれているのかしら。

草助 ?なんですか、一体？

奈津 実はね、大変なのよ。驚かないですよ。

草助 驚きやしませんよ。

奈津 ほんとに？(声を潜め) あんたのおっかさんが出て来ているのよ。

草助 ええ！

奈津 ほら、驚いた。

草助 驚きますよ！母さんが？ ど、どこに。(見廻す)

奈津 大きな声出さないですよ。(声をまた潜め) ここじゃないのよ。ここには来られない訳があるんだから。私の家(うち)。

草助 あなたのところには？ どうして、また。なんでなんです？

奈津 びっくりするわよ。

草助 いいから。

奈津 きくちゃんと私は、娘の頃、大の仲良しだったのよ。

草助 ええ？

奈津 ほら、びっくりした。

草助 本当ですか？

奈津 ともかく一遍、おっ母さんに会ってやっておくれよ。うちで待ってるんだから。(手を引く)

草助 (振り払い) 僕は川越へは帰りません。

奈津 まあいいからうちへいらっしやいよ。ね。(また袖を取り) 可哀想におっ母さん。

心配してたなんてもんじゃないんだから。

本をかかえた涼月が、奥から出てくる。

涼月 誰だい、そんなところで……。

草助 先生。恋文屋さんです。(離れて自分の机へ戻る)

涼月 奈津さん。(急に機嫌がよくなり) ちょうどよかった。上がって、上がって。ね。

奈津 (草助の方を気にしながら) はい、……はい。

涼月 どうしました？

奈津 (お月見飾りに気づき) あら、まあ。今夜は十三夜でしたか。そうね、そう、そう……。(見上げて) まあ、きれいだこと。

玄関の鈴が鳴り、草助、下手へ入る。奈津、縁に座る。

涼月 いやあ、お陰様で『白孔雀』。とても評判がいいらしいんだ。評論家連中には、また、くそみそだがね。売れば官軍だ。ともかくありがとう。礼を言わせて下さいよ。

奈津 何ですよ。お弟子さんたちに見つかったら、大先生の威厳に傷が付きますよ。でも、よかったわね。私も、そのことがあったから……ちょっとこっちへ回って見たんですけど。(ふと、気になって) そういえば、あの『白孔雀』ね……主人公の香月保さんと、芸者の白妙さんはずっと離れ離れになってますね……。

涼月 そうだねえ、長い長い間。

奈津 で、最後はどういう結末にしようと思っているの？ 離れ離れになっていた二人は？

涼月 結ばれる！

奈津 え。

涼月 一度は、死んでしまったとお互いに諦めるんだが、実は、生きていたんだね。艱難辛苦、幾星霜、波瀾万丈の浪漫の末、二人はかたく……。

奈津 だめよ！ だめ、そんなの。だめ！

涼月 ええ。

奈津 だめ！

涼月 奈津さんだって、私と小菊みたいに別れっぱなしじゃだめだって、あんなに言うてたじゃないですか。

奈津 だめよ、だめ。やっぱり考えたらね、別れたままの方がいい。その方が、とてもとても浪漫チックよ。とっても悲しくていいわよ。

涼月 でも、近ごろ、歳のせいですかねえ、いつもみたいに、心中したり別れ別れになつて死んでゆくのかかって、なんとなく辛くなってきたんですよ。だから、今度は思いい切って巡りあ……。

奈津 巡りあわない！ そんなんで会っちゃったら、お手軽すぎますよ。人生、そう小説のようにはいかないんだから。だめ。涼さんはやっぱり、独り身の男の孤独な影を背負って生きているところがいいところなんですから、だめ。やっぱり、だめ。別に私が白妙さんに会う訳じゃないですよ。
涼月 そりゃ、判ってますよ……涼さん……もしも……もしも、よ……（きくちやんが……）

と、言いかけると、お筆がお茶を持って出る。

お筆 いいお月夜になりました。

奈津 え？そうですか？

お筆 ご覧になってたんじゃありませんか。（薄など直す）

磊落に、手土産持参の田熊登場。草助続く。

田熊 （正座して）先生、ますます好評、おめでとうございます。我が社といたしましても万々歳でございます！

涼月 （また、大家風の態度に変わり）ああ。うむ。（庭へ降りる）

奈津は涼月にすり寄って、二人、前の方へ。月を仰ぐ。

奈津 涼さん、涼さん。ねえ、来年の今月今夜、再来年の今月今夜も、ここでこうして、私たち……お月様が見られるかしら。

涼月 老少不（ふ）定（じょう）、明日（あす）の運命は判りません。

奈津 （すがるように）そんな悲しいこと言わないで下さいよ。来年も再来年も、こうして……一緒に……月を見ましようよ。ね？……涼さん。涼さんたら。

涼月 （ちよつと気圧されて）判ってますよ、はい。

奈津に、やっと笑顔が戻る。

一同、月を打ち仰ぐ。

田熊 今日こそ、続きの原稿をいただいて帰りますぞ、加賀美先生！

それぞれの思いで、十三夜を仰ぎ見る。

皆皆一様に、月の光を浴びて、まるで青い水の中の魚のよう……。

道具替わり。

第五場 上野池の端、不忍池

寛永寺から不忍へ抜けた石段の下あたり。

こんもりとした上野の森の一部と、石段が少しのぞいている。苔むした石垣に色づいた蔦など。正面に不忍池が広がる。石碑、積み石、立ち木など適宜。萩が咲きこぼれている。

前場の数日後の午後。

百舌の声。水鳥の羽ばたきの音など少し。

美術学校の女学生が二人、不忍池の方を写生しながら歩いている。

揚幕より、草助と普段着の桃太郎が出る。草助は、少し先をぶらぶら歩いている。

草助 ……(ちよっと止まって振り返るが)……。 (また歩きだす)

桃太郎 ……草さん、草さん。また、戻って来ちまったわね。

草助 ほんとうだ。ごめんよ、くたびれたろう？

桃太郎 (頭を振り) こうやって上野のお山をぐるぐるぐるぐる。おかしいわね、私たちって。

草助 東京の者だったら、もう少し洒落たところ知ってるんだろうけど、俺……判んないから。

桃太郎 そんなつもりで言ったんじゃないわ。私は、こうして草助さんと二人でいられば、それだけで……嬉しいんだから。

そんな二人をじろじろ見ていた画学生に気づき、二人離れる。

画学生ら、少し笑いながら下手へ去る。

草助 (見送って) 親の金で美術学校か……。 悩みなんて無いんだろうなあ、あいつら。(口惜しい)

桃太郎 (髪の前ざしに触れ) 草さん、ほんとにいいの？ この簪。高かったんでしょ？

草助 え？ (笑って) 安物だよ、安物。いくら玄関番だってそのくらい。

桃太郎 お願いだから無理しちゃ、嫌よ。こうして会えるだけで、本当にいいんだからね。

草助 ちよっと曲ってる。(簪を無粋に真っ直ぐ直してしまう) 今晚、講演旅行から戻っ

てらしたら、籠城して一気にお書きになるっておっしゃってたから……。これで、しばらく、出られそうもないよ。

桃太郎 ……やっぱり、私たちのこと、先生に知られたら、だめかしらね。

草助 だめだよ！ 決して許しちゃくれないよ。

桃太郎 私が、海老茶の袴でもはいたお嬢様だったらまだよかったのにねえ。

草助 何も芸者だからいけないっていう訳じゃないよ。俺が、修行中の身で……。

桃太郎 でも、芸者嫌いで有名だ、って。

草助 そんなのは口だけだよ。職業で人を差別するような方じゃないよ、先生は……。

桃太郎 どっちにしても、私が芸者のままじゃ、八方ふさがりってことは確かよね。

草助 ……くそっ。ああ、なんとかして、芸者の足を洗わせたいなあ。

桃太郎 お金……かかるわよ。

草助 桃ちゃんの為なら、何とでもするさ！

桃太郎 じゃ、私のためなら小説もあきらめてくれる？

草助 小説を諦めるの……？

桃太郎 そう。川越のお芋畑売って、私の借金を払って、二人でどっかで、小ぢやかな焼き芋屋でもやって暮らすのよ。

草助 焼き芋屋になるの？ 俺が……。(真剣に考え込む)

桃太郎 ……馬鹿ねえ。言ってみただけよ。

草助 うーん。

桃太郎 冗談だってば、そんなまじめな顔して、いやだ、……ごめんね。

草助 いや、まじめな話だよ、これ……。

山鳩が鳴いている。上手石段より、片桐と馬場、この辺りのやくざ、山下の増三が談笑しながら通りかかる。

片桐 (気づいて) ……よっ、お楽しみ。

草助 あ！

片桐 見直したぜ。先生のお留守に、やるもんだなあ、草助。

草助 いや、そんなじゃないんです。あの、誤解しないでください。俺たち、あの……。

馬場 何も誤解なんてしてないよ。

草助 いえ、そういう意味じゃなくて……。

片桐 (桃太郎へ) ふーん、あれに黍(きび)団(だん)子(ご)でもやったのか？

桃太郎 片桐さん、あなた……。 (髪の毛が逆立ちそう)

片桐 (笑って離れる)

馬場 (間に入るように) 桃太郎も。うちのを、なんだ、あんまりその気にさせるなよ。

桃太郎 私、そんなことしていません。そんなんじゃ……。

草助 (それを遮って) あの、先生には、必ず、このことは……。
片桐 そんな野暮天に見えるかよ。
草助 いえ……その……。
増三 兄(にい)さんたちの弟分かい？
片桐 出来た弟でしてね。
馬場 (草助へ) 例の山下の増三さんだ。俺たちの知らない世界を教えてください、まあ、一方の師匠だな。
増三 おきやがれ。(草助へ) 兄さんも、一度お遊びにいらっしやい。お小遣いくらい、すぐ稼がせてさし上げますよ。
馬場 やめて下さいよ。こいつには向いていませんから。

桃太郎、草助の袂を引く。

片桐は「ももたろさん ももたろさん お腰につけたきびだんご……」などど歌いながら、増三と馬場、下手へ入る。苦笑しながら続く馬場。

桃太郎 こんどお座敷で会ったら、三味線でぶん殴ってやる。
草助 片桐さんは、そんな人じゃないよ。ちよつと口が悪いけど。
桃太郎 やな奴に会っちゃったなあ。もう、そろそろ帰った方がいいかもしれないわ。
草助 うん。(不安になってくる) そ、そうだね。
桃太郎 また、きつと会ってくれる？
草助 馬鹿。当たり前じゃないか。……桃ちゃんこそ……。
桃太郎 馬鹿。
草助 当たり前か？
桃太郎 うん。
草助 きつとすぐ会えるさ。それまで、辛抱。今度は手紙を出すよ、必ず。
桃太郎 うん。待ってる。きつと、手紙書いて。簪ありがとう。

草助、去りがたいまま、歩きだす。

簪をさし直しながら見送る桃太郎。にこやかさの後の淋しさ。

歌③ 「不忍のふたり」 (桃太郎と草助)

じゃあね…… さようなら
ああ また 気をつけて
ぐるぐる廻る 俺(私)たち

燃える思い　ときめき
胸しめつける　ほほえみ
ゆらゆらはらはら　ふたりの迷路

ほら　ふしあわせが　見ている
そんなにうまく行くはずはない
しあわせには　私たちなんて　見えない
それが　あたりまえ
それが　生きるという迷路

でも悔やまない　会えたこと
手紙を書くよ（わ）　会えなくても
せめて伝えよう　この心を
忘れないで　忘れないよ（わ）
いつまでも　この思いを

草助は花道へ。見送って上手へ入る桃太郎。
道具替わり。

第六場　奈津の家

前場より数日後。小雨の午後。
上手の部屋は、きくの着物や羽織が吊るしてあり、鞆やその中身も鎮座し
てこの部屋がすっかり彼女の仮住まいに変質していることを物語ってい
る。

中央の部屋で、机に「日々新報」を幾枚か広げて、お茶を飲みながら不機
嫌そうに読んでいる奈津。

奈津　白妙の美しい横顔に、重たげな長いまつげが、蝶のようにひらりと動いた。黒い瞳
が潤(うる)みをたたえたまま、じっと香月保の面(おもて)に注(そそ)がれている。
『白妙』『はい……』ハンケチで覆うたものの、その花の顔(かんばせ)は匂やかに
薄絹を透(す)いて隠しようもない。『つらかったわ……香月さん。お察しください

ね、あなた……』香月も湧き出(いづ)る涙を拭おうともせず、白妙の、かげろうの羽根のごときたおやかな肩を引き寄せた。『私もだよ、白妙』……なーにが……。

新聞をほうり出しておせんべいをかじる奈津。

下手より、きくとたみがひとつ傘にくつつくようにして登場。きくは裾をからげて、風呂敷包みを背負っている。たみが先に玄関に飛び込んでくる。

たみ ただいま、先生。

奈津 なによ、あんた。お店ほっぽりだしてどこへ行ってたの？

たみ ごめんなさい。あの、きくおばさんと一緒だったんです。

奈津は新聞を片付けて出迎える。

きく ただいま。

奈津 何よ、どうしたのその荷物。(たみへ自分の手ぬぐいを渡しながら) よく拭くんですよ。風邪はやってるんだから。

たみ はい。

きく 見て、見て。これだけ仕入れて全部で一円二十銭よ、どう？ 安いでしょ。(裾をおろし、足をふいて上がる)

奈津 (品物を数えてみて)……まあねえ。そりゃ確かに安いけど……。どういうこと？

きく ここがあんまりはやらない訳が判ったっていうことよ。第一に品物が高い。この風船なんかよそじゃ三つ一銭で売ってたわよ。

奈津 ほんと、それ。

きく ほんとよ。小さな商いは、一銭二銭が勝負でしょ？ 同じ一銭の儲けを上げるんだったら、二銭で仕入れて、三銭で売るんじゃないかって、同じ品物を一銭五厘で仕入れられるところを探して、二銭五厘で売る。そうでなきゃ、二銭で仕入れたものを二銭五厘で二つ売る。ね、そうすればお客様も、いつもなら三銭のものを五厘安く買うことができるし、他所より安いって評判が立って、新しいお客がつくって、こういう風になりますね。それが、商いというものですよ。

奈津 (感心して) あんた、かわったわねえ……。

きく 今ね、そこるところ、品物を見やすいように並べ替えてあげるから。おたみちゃん。

(促して立ち上がる)

たみ はい。(立ち上がる)

奈津 ちよっと、ちよっと待ってよ。(座らせて) なんで私がここでこんな店をやっているか前にも言ったでしょ？ 小説では芽が出なかったけど、なんとか筆でその日

その日を送れたらと思って始めたのが恋文屋じゃないの。それだって、もともと一

葉先生が、このはす向かいで荒物屋の片手間になさってたことなのよ。けど若い娘が一人で、手紙の代筆はありませんかって、日がな一日ここに座っていたってお客がくる訳がない。じゃ、一葉先生にならって、小さな商いでもしてこの住人になれればいいんだって、そう思ったのよ。だからね、荒物はそこそこ損をしないで、(書くまねをして) こっちのほうの助けになればいいと思ってるのよ。そんな、真剣に『荒物屋一葉』にはなりませんよ、私。

きく
それがいけないんだよ。私は、それが間違ってると思うよ。
奈津
なんでさ。

きく
そんなお道楽気分でやっちゃいけないんだよ。
奈津
お道楽なんて……。

近所の女が買物に来て、おたみが対応する。あれこれ見て、たわしと紙などを買って帰る。

きく
こういう土地じゃ、ほかの店はおそらく飴玉一つ、メンコ一枚にも家族何人かの暮らしがかかっているんだと思うよ。そのところはちゃんと弁えて、お互いに競争していかなくっちゃ。それに昨日来てたのは、あれ、実家の手代さんだろ？ いつも、ああしてお金持って来てくれるのかい？ そんなことじゃ、みんな中途半端になっちゃうんじゃないかねえ。

奈津
中途半端？ だよ、その言い方。あんたほんとうに変わったわね。

きく
そんなに変わったかしら？ でも二十一年だよ。家(うち)があんなことにならなければ、まだ袂の長いのを着て、お嬢様でいられたのを、いきなり芸者に出されちゃまって。あんたに会った頃は、世間のことなんてなんにも判っちゃいなかったのよ。そうかと思ったら、涼さんと……、いろいろあって、川越の百姓の嫁になって……。そりゃあ多少は変わりもするよ。

奈津
多少？

きく
おたみちゃん、(風呂敷の中の駄菓子を渡し)これ、妹さんと食べておいで。でね、後でお爺ちゃんに言って、金づち貸してもらってきておくれね。

たみ
はい。

きく
釘は、角の建具屋のおじさんに、そう言って、一寸五分くらいの五、六本貰ったよ。
で。

たみ
一寸五分。

きく
そう。一寸五分。

たみ
はい。

と、手ぬぐいをかぶって走り出て行く。

奈津 ……きくちゃん。……川越の方、こんなに帰らなくて平気なの？

きく 草助が会ってくれるまで、もう少しかかりそうでしょ？……このくらいの骨休めは許してくれるわ。今じゃ、舅と姑も仏様のようなもの。

奈津 あんたを死んだことにしちまったお舅さんたちなの？

きく そりゃあいろんなことがあったけど。でも、お陰様で、私って商売に向いてるってのに気がついたのよ。知ってた？百姓だって商売なのよね。今じゃ五人も人使って、羽生家の立派な大黒柱だもの。これで草助さえ、馬鹿なことし出かしてくれなかつたらねえ。

奈津 小説家なんて、なりたいたいからって言って、それだけでなれるもんじゃないんだから、そのうちきつと諦めるわよ。あんたも川越に帰って待っていたほうがいいんじゃない？

きく ……そうかなあ。

奈津 そうよ。そうした方が、きつといいって。

きく うーん。そうよね。昔からあんなに物書くの上手だったなっちゃんだって、小説家の先生にはなれなかったんだもの。だいたい、ああいうものは、本人の素質がものをいうんだから。

奈津 素質ねえ……素質ならあるかもしれないわ……。

きく 素質？（ちよつと考えて）……どうして、そう思うのよ。

奈津 どうしてって……だって、あの子……。（とまで言って、はっとする）

きく ……だって、あの子……どうしたのよ。

奈津 （うろたえて、立つ）だって……だって……あの子、本当に小説好きだもの。

奈津 （静かに、相手を見透かすように）私だって好きよ。

きく そ、そうね。ただ、なんとなく、そんな気がするだけ。あの子、頑張り屋だから。その……。

奈津 私は頑張り屋じゃないっておっしゃるの。

きく いやだ、そういう訳じゃないのよ。

奈津 どういう訳？

きく 小さいころから、本読むの好きだったし、（睨んでいる奈津を見て）そりゃ、なっちゃんも好きよね。

奈津 ……亡くなった旦那さんって、どんな方だったの？

きく え？ うちの人？……そうねえ、人のいい、のんびりした人だったわ。

奈津 やせてた？ 太ってた？

きく 太ってたわ……（気づいて）なっちゃん、あんた、何疑ってたんのよ。

奈津 （唇を噛む）

きく いやだ、そんなんじゃないわ。あんた、それは勘違いよ。

奈津 ……何が勘違いよ。

きく あの……あの子が……。

奈津 (なんだか口惜しい) 涼さんとの子だっていうのが？

きく ……違うわよ、ほんと、妙なこといわないでよ。怒るわよ、私。いやだ、なにそれ、ひどいじゃない。違う、違う……。

奈津 ご亭主さんは、知ってたのかい？……私にまで嘘つくことないじゃないよ。

きく、言葉に詰まり、観念する。

きく (頷く)

奈津 まあ……。(衝撃) あの子が……あんたと涼さんの……子。(泣きたい)

きく (頷く)

奈津 まあ……きくちゃん、ずいぶんじゃないよ、あんた。(何故か腹立たしい) 草助さんは、知ってるの？

きく 知ってる訳ないじゃないの。

奈津 涼さんは？

きく 知ってたら今頃ここでこんなこと言ってる訳ないじゃないの！ もし、このままあの子が涼さんの所において、何かの拍子に親子だなんて判ったら……ああ、どうしよう……。

奈津 ……。

きく ほんとにどうしよう、ねえ、なっちゃん。羽生の家にもすまないし、むこうのお家(うち)の人にも悪いよね。

奈津 え？

きく お子さんだっていらっしやるんだろ？ 先生様だもの、やっぱり奥様も私らと違う、いいとこのお嬢様をもらったんだろうね。

奈津 ……。(あっけにとられている)

きく あの子みたいなお弟子さんを何人も住まわせているんじゃない、さぞかし大変なんでしょうね、奥様も。……ね。その奥様にも申し訳ないし……。

奈津 え？……ええ……そ……そう……かしら。(意地悪い気持ちになってきた)

そこへ下手より、普段着の桃太郎が訪ねてくる。

雨は、少し前に上がっている。

桃太郎 今日は。

奈津 (助かった気がして) あ、桃ちゃん？ はいはい。どうしました？

桃太郎 はい、……お客様でしたら、また来ます。

きく あ、ごめんなさい。私は構いませんよ、身内のようなものですから。(立って、奈津へ) じゃ、私、こっち片付けてますから。大丈夫、そんないじくりまわさないから。(桃太郎へ) どうぞ。

と、店先へ移り、気を変えてあれこれ商品を移しだす。

奈津 あ、拭くもの出しましょうね。

桃太郎 大丈夫、もう上がってますから。平気よ、先生。(手拭で軽く足を拭いて上がる)

奈津 久しぶりね、どう、元気だった?

桃太郎 桃太郎はいつだって元気です。

奈津 それが看板ですものね。

桃太郎 せめてそのくらい売り物がないと、お座敷がかかりませんもの。

奈津 手紙ね? どんな?

桃太郎 (眉を曇らせ) ある人に会えるようにしてほしいんです。

奈津 お客様?

桃太郎 (恥ずかしそうに) 違うんです。その……。

奈津 まあ、桃ちゃんにもやつと春が来たんだ。そりゃそうだ。今まで浮いた噂がないのがおかしかったんだ、あんたなら。で、どんな人なの?

桃太郎 ……玄関番さんなんです。

奈津 え?

きく (仕事をしていたが) へえー、玄関番なんて仕事、よくあるんだ。東京じゃやってるのかねえ。

奈津 (思わず、きつと睨む)

きく あ、ごめんなさい、人の話に。(と、向こうを向いて仕事を続ける)

桃太郎 (懐から手紙を出し) これ……恥ずかしいけど、ちょっと読んでみて下さい。難しい字があるもんだから、全部は読めないんです。

封筒の差出人を読んでぎょつとする奈津。「弥生町十五 加賀美涼月先生 方 羽生草助」とある。奈津は手紙を開き、紙面と桃太郎を交互に見る。
たみが釘と金づちなど持って、小走りに戻る。

たみ もらって来ました。

きく ご苦労さん。お手柄お手柄。ちょっと、これ、そこへ持って行って。(など指図して仕事をする)

奈津 ……(冷静を装い) しばらくお邸を出られないが、どうにかして一目会いたいって

書いてあるわね。

桃太郎 そうなんです。もつと簡単に書いてくれればいいのに。(手紙をのぞき込み)ほら、ここ……。

奈津 「潔癖」。けつぺきって読むのよ。頭に来ちゃう病気のことよ。

桃太郎 はあ……そうなんだ。これ、これも難しくて……。

奈津 下手なくせに筆で気取ってるから、読みづらいのよ。親が字が下手だと子供まで下手ね。

桃太郎 ？

奈津 (構わず) これはね「ことのほか芸(げい)妓(ぎ)を嫌(けん)厭(えん)なさり」。

桃太郎 けんえん？……犬と猿？

奈津 違う違う。嫌っていやがること。

桃太郎 (悄然と) やっぱり本当にお嫌いだったんだ。

奈津 (怒って) まあ、とんでもない男だわね、この先生。何だってそんな偉そうに嫌えるんですかね。自分だって昔は好きだったくせに。

桃太郎 え？ 先生。ご存じなんですか、この……。

といたたところで、きくが釘をどんどんと打って、桃太郎の声がかき消される。

桃太郎 ……って人。

奈津 え、知りませんよ、こんな馬鹿なことを偉そうに説教する爺いなんて。これで「先生」？なに言ってるやがんでえ！

桃太郎 でも、とても有名な先生なんですって、その……

きく (どんどんどん)

桃太郎 って先生。

奈津 まったく、もう！(なぜか働いているきくを睨む)

きく ごめんなさい。これだけ(どんどんどん)。

会話からそれぞれの思いの歌になってゆく。

歌③ 「心のままに」 (きくと奈津、桃太郎)

桃太郎 「暫く会えそうもないって、書いてあるでしょう？」

きく (どんどんどんどん)

奈津 「ひどい 許せない！」

桃太郎 怒らないで まじめな人なの

奈津 許せないのは 馬鹿爺い

桃太郎 へたな手紙書いたら

嫌われるかもしれない

だから 先生 会えるように 手紙を

奈津きく まかせなさい!

「誰だと思う?」

奈津 恋文屋一葉

きく 芋作り一筋

奈津 腕をこらし 書きましよう

小説なんて無理だと

きく ずっと 秘密 守るわ

心一つに隠して

※《》はきくの歌詞。

奈津きく 早く故郷(くに)へ帰って

新しい道を《前の暮らしへ》 生きると《戻ろう》!

わたしの筆《腕》ひとつで 思い通りにさせるわ

奈津 私の才能は 小説より手紙

きく 私はもしかして 百姓より商売

桃太郎 わたしの願い なんてわがままな

あの人の 夢を叶えてあげたい でも 一緒に暮らせたら

奈津きく まかせてよ

三人 心のままに 今のこの私の

心のままを

手紙を書きまくる奈津。店を改造するきく。町の人々が加わってもよいかも。

自分を励まし、奮い立たせようとする三人の女たち。

興奮と熱狂のうちに、幕が降りる。

第二幕
第一場

加賀美邸

前幕の数日後。十月三十日の宵。この日は涼月と奈津の師であった尾崎紅葉の八年目の祥月命日である。

涼月の仕事机が少し上へ寄せられ、座敷が広く空けてある。

仏壇の前に二月堂が置かれ、常になく多くのお供物が、上げられている。

上手の書齋では、お筆が仏壇の灯明を取り替えている。下手の広間では、片桐が椅子に腰掛け新刊本をばらばら眺めている。友繁は涼月の外套、馬場は帽子を持って立っている。

新聞社の田熊は下手の縁先で、灰皿を持って煙草を吸っている。

一同、尾崎家へ出掛ける涼月を見送る支度と言った所。

馬場

(一同へ) お出掛けになります。

涼月と懐中物を持った草助が降りてくる。田熊は慌てて煙草を消す。一同立って迎える。紋服の涼月は、仏壇の前に座り、鈴を鳴らし合掌、黙礼。草助の差し出す小物を懐中する。

お筆

(供えてあった風呂敷包みを渡し) 紅葉先生の奥様へでございます。

涼月

うむ。

涼月、玄関へ向かう。

田熊

いってらっしゃいませ。お帰りを待たせていただきます。

涼月

うむ。

お筆

いってらっしゃいませ。

涼月、わずかに曲がった額など直しながら、下手へ去る。弟子たち、ぞろぞろと続く。

玄関の鈴が鳴る。出会い頭の初子の声が聞こえてくる。

初子の声

……あら、先生、お出掛けでいらっしゃいますの……まあ……どうしましよ

弟子たちの声

いってらっしゃいませ。

涼月の声

誰ですか、玄関掃(は)いたのは！(などなど)

閉まる鈴の音。一同、がやがやと弛緩した雰囲気に戻り、それぞれにくつろぐ。田熊、一度消した煙草に火を点けて、筆に茶を求める。筆、上手へ去る。

片桐 (戻りつつ) 相変わらずだなあ。涼月担当ならば、師匠の尾崎紅葉の……。

馬場 先生。(と付け足す)

片桐 (憮然) ……の、祥月命日くらい知っとくもんだぜ。

初子 恥ずかしいわ。じゃ、牛込へいらしたのね。

友繁 八年になるんですよ。

馬場 諸行無常、会者定離。早いものです。

田熊 『文芸倶楽部』さんよ。それで、例の『翡(ひ)翠(すい)鳥(どり)』は、書き始めていただけたんですか？(黄色い声を模して)「先生！ 先生！ 先生の原稿、まだ頂戴できませんの？ 私、許さなくってよ！ 先生！」

初子 もう、意地の悪い人！

片桐 『白孔雀』、大分いい商売になりましたね。

田熊 御明察。やはり加賀美先生は、日本文学界の至宝ですな。

片桐 「通俗文学界」の、宝なの。

このころ、お筆がお茶を持って上手より出る。いつものように平然と聞き流しているが、不快感を隠せない。田熊の前にお茶を出し、仏壇の前を片付けたり、線香を継いだりする。

草助 ……通俗とは、そのように卑しめられなければいけないものなのですか？先生は

いつもおっしゃっています……。

田熊 「俗の中に風流あり」ですか？

草助 そうです。

片桐 草助、こういう言葉もあるんだぜ。『風流の中に大俗あり』ってね。お前、もうちつと真剣に勉強しな。

草助 俺は、いつだって真剣です。

友繁 川越じゃそんなに勉強しようがなかったんじゃないかい？

田熊 やはり、まだ行(あん)灯(どん)で瓦版を読んだりするんですか。

田熊、片桐、友繁笑い転げる。この時、玄関の鈴が鳴っている。

馬場 ?玄関の鈴が鳴らなかったか？

初子
（脅して）先生だ！

「えっ」と、反射的に、一同直立する。耳を澄ますが、気配がない。一同、笑いあつてごまかす。

馬場
やりますねえ、初子女史。

友繁
（初子へ）兎みたいでしょ。癖なんですよ、へへへ。

お筆
あなたたち！

お筆、前へ出て一同をにらみ回す。

お筆
ここは、硯友社尾崎紅葉先生御門下、加賀美涼月先生のお仕事場です。御不在とはいえ、先生の心の目が光っているとお願いなさい。

初めて激しい表情を見せて、お筆上手へ去る。

一同、興がさめる。片桐、下手へ去ろうとするのを、

草助
片桐さん。……先生は、片桐さんをここまで育てて下さった恩師ではありませんか。

その大恩ある方を……俺は聞いていて楽しくありません。

片桐
聞いて下さいとは言つてないよ。

草助
だったら、どうして……先生の下を離れないのですか？

片桐
……この年になって、今更他（よ）所（そ）の門を……叩けるかよ。（本を持ち）夏目漱石読んでるか？

草助
はい。

片桐
藤村は？ 荷風は？ 谷崎って、とんでもない若造、知っているか？……紅葉先生の門人は、そろいもそろって討ち死にで、眉（び）山（さん）さんなんぞは、ほんとうに自分から死んじまったい。なのはどうだ、うちの先生ときたら、十年一日、俺が入門した時と、少しも変っちゃいない。通俗だって構やしな、しかしな、俺がよく判らんが……じりじりして、ただこう、無性に焦ってるんだ！

草助
……。

田熊
（片桐へ）だからこそ、私は君に、鷗（※旧字体でお願いします。中は「品」）外先生のところへ行くことを勧めてるんだがね。

友繁
本当ですか？

馬場
片桐さん……嘘でしょう、そんなこと……。

この少し前より、忘れ物を取りに戻った涼月が、袂など探しながらゆっく

り下手より出ていたが、田熊のセリフに障子の外で立ち止まり、話を立ち聞く。

片桐 (笑い出し) まあ、いいじゃないか。さ、やめだやめだ、こんな辛気臭い話は。鬼のいぬ問だ。馬場さん、どう？ 少しでもいいなら。

馬場 酒は……いかん。

友繁 草助、行くぞ。

草助 ええ？ 駄目です。先生に申し訳が立たない。

片桐 笑わせるなよ。もうとつくに申し訳なんかなくなっちゃってるじゃないか。あの手紙。

草助 え？

片桐 「故郷(くに)の姉」からっていう、達筆のお手紙だよ。

友繁 ここんどこ、毎日ですわね。

草助 いや、あれは……その、違うんです。

片桐 何が違うんだよ。桃太郎のためなら、俺だって一肌脱ぐぜ。簪代だって貸したままだろう？

田熊 草助君、隅に置けませんね。諸君、武運を祈る。(敬礼)

友繁 はっ。(と、敬礼を受けて) 初子さんも行きませんか？

初子 え？ 私はだめですわよ。そんな。

友繁 馬場さん、よろしく！(初子へ) すぐ帰してあげますよ。「旅順開城約なりて 敵の將軍ステッセル……」

片桐 (草助の肩を抱き) 手紙、どこだい？ 見せろよ、おい。

草助 いや、駄目ですよ。……そんな。

はしゃいで初子の手を引く友繁。抗う草助を抱き抱えた片桐が下手の障子を開けると、先生が立っている。

一同、氷のような沈黙。

涼月 ……数珠を忘れた。

仏壇へ向かい、座り、数珠を取り出す。一同じっと息を殺している。

涼月 草助。

草助 ……はい。

涼月 私も、その手紙を見てみたい。出しなさい。

草助 ……いや、……それは……。

涼月 どうした……見せられないのかね。

草助 ……。

涼月 見せられない訳があるのか。

草助 ……あれは……あれは私信です。他人にお見せできるものではありません。

涼月 私は他人かね。

涼月、立って、ゆっくり草助の前へ。息を飲む草助。

涼月 芸者からのラヴ・レターだから見せられないのだね。

草助 そ……そんな……。

涼月 (初めて声を荒げ) そうではないとお前は言えるのか！ 私に向かって、天地神明に誓って、そうではないと言えるのか！

草助 ……。(がくりと座り込む)

涼月は、書生部屋へずかずかと入って行く。草助は、あわてて部屋へ続く。

しばらくして、手紙を五、六通読みながら先生が戻る。おろおろ追う草助。

ぱらぱらと立て続けに読んで、足元へ散らす。這い回ってかき集める草助。

この時、一通のみ、机の上に残すべし。

田熊 ……私たちは、どうも……ご遠慮申し上げたほうが……。谷君、失礼しようか。(と

言うが動けない)

初子 はい……。

涼月 (静かに) ……君たちは、どうして……そう、中途半端なのだ。孤独を尊ぶと言

いながら、すぐ仲間を求めたがる。清貧を好むと言いながら他人の懐を頼りにしてい

る。一事が万事、その調子だ。都合のよい時だけ、師になり友人になり弟子になる。

新しい思想を浴びたければ、崖を蹴って新しい淵へ飛び込んでみたまえ。……我が

身だけは傷つかない高みにいて、泳ぎが上手いの下手のと、批判することばかりう

まくなっている。……いや、君たちだけを言っているのではない。今のこの国すべ

てがそうなのだ。確かに私は、時代から取り残されて行く男だ。十年一日、まさし

くその通りだ。皆が皆、海の外へ思いが向いているから、私はあえてとどまってみ

たいのかもしれない。こんな時代だからこそ。せめて本を開く時くらいは、読者に一

時の夢を見せてやりたい。通俗を押しつけられているのではなく、あえて、自ら、俗の中に生きたいと志しているんだ。(厳然と) 帰りたまえ。

各々に気まずさを払うようにして、黙礼などして去って行く。

草助一人残る。

涼月 何故ものを書こうと思った？ 初めにそう考えた時のことを思い出してご覧。

草助 (涙をこらえている)

涼月 君は私の作品が好きだと言ってくれた。そして本物の小説を書いてみたいと言った。……私に出来ることは、君に小説を書かせてやることだけなんだ。判るか。

草助 (涙をこぼすままに聞く)……先生。私は……何があっても先生の弟子です！……

先生。

涼月 行きたまえ。

草助 先生！

しばらく見つめあう師弟。やがて脱兎のごとく下手へ去る草助。

しばし見送る涼月。

涼月 ……一言も謝らないで行っちまいやがった。

雁の声が降るように聞こえてくる。縁先へ出て、見上げる涼月。

涼月 やあ、来た、来た。雁の群れだ……。よく、ロシアから不忍池まで、毎年間違えずに来るなあ。(雁の群れ飛ぶ空へ手を上げ)……ズドラスヴィツェ。雁は迷いませんか……。

ふと、机の上に残された本に目を留め、ばらばらと立ったまま見る。片桐が読んでいた漱石の「虞美人草」。

涼月 ……夏目漱石……か……。

と、思わず強く本を閉じる。大きくひとつ息をついて、心を落ち着ける。その本をテーブルへ戻したとき、先刻、残された手紙を見つける。気になり、手紙を読み始める涼月。そのうちに、疑念が沸き起こる。ただの若い芸者の文章とも思えない。

涼月 ……。

そこへ玄関の鈴が鳴り、奈津の声。「今晚は」そして登場。落ち着いた着付けに黒紋付きの羽織。

奈津 どうしちやったのよ、玄関番。ねえ、ねえ、涼さん。あの、川越の玄関番、どこ行っちゃったのよ。

涼月 草助かい？

奈津 また何か叱られるようなことしたの？

涼月 叱られるくらいでこたえる玉ではありませんよ。

奈津 あら、そんなことありませんよ。純情で清潔で、……あなたの若い頃とは似ても似つきませんけどね。欺されたわよ。

涼月 え？ お前さん、わざわざ下谷から厭味を言いに来たのかい？

奈津 (少し呼吸を整えて) 紅葉先生のお宅で待ってたんですけどね。ちっともあらわれないから、どうしたのかと思って。

涼月 ちよほどよかった。奈津さんに話があったんですよ。

涼月、例の手紙を放る。奈津、それを手にして驚く。

奈津 あら、これ……涼さん、どこで？

涼月 語るに落ちるとはこういうことですねえ。

奈津 (気づいて) あっ……。

涼月 何でそんな手紙書いてやってるんですか？ 私が弟子に、芸者遊びを禁じているの知らない訳ないでしょうに。

奈津 それよ、そのことなのよ。可哀想じゃありませんか。今時珍しい心根のきれいな子たちなんです。それを杓子定規に、弟子だから、芸者だからじゃ、ちよつとばかり情(じょう)がなさすぎやしませんか？

涼月 私は、弟子のために言ってるんです。私の好みで言ってるわけではありませんよ。

奈津 自分は芸者に惚れたはれたであれだけ騒いでおいて、弟子だけ駄目は、あんまり理不尽じゃありませんか？

涼月 私が苦労して、小菊にだって辛い目にあわせてしまった。だから、弟子たちにはそんな思いをさせたくないって、そう思うから……。

奈津 それが話が逆だって言うんです。自分が苦労したから、弟子たちにはそんなつまらない苦労させたくないって、そう思うのが普通でしょ？

涼月 (ちよつと考えるが) 言ってることは一緒じゃありませんか。

奈津 やってることは正反対ですよ！……修行の障(さわ)りだからって、紅葉先生に無理やり別れさせられたの、忘れた訳じゃないでしょ？

涼月 私は小菊に出会わなければ、今のようなまっとうな暮らしが出来ていたか判らない。しかし、それ以上に、紅葉先生に見いだしていただいた計り知れない大恩があるんです。それを思えば、お言いつけに背くことはできなかつた。

奈津 小説と人の生命(いのち)と、どっちが大切なのよ。そんなこと言ってるから、き

くちゃんは死んだ気で人の嫁さんになって、病気になってほんとに死んじゃったん……でしょ？（ちよつと言葉に迷ったが、とりあえず責める）涼さんの所以ですからね！

涼月 それを言われると……（つらいー）。

奈津 それに涼さんたら、きくちゃんと二人だけで会うのは恥ずかしいもんだから、『なっちゃん一緒に来て、なっちゃん一緒に来て』って、いつも三人で『たけくらべ』みたいになってたじゃない。涼さんたら、いつも「人は心だ」「人間、心と心だ」とかなんて言ってたくせに。それなのに……（思わず）この大嘘つき！

涼月 え？

奈津 （言った方もはっとして）え？ いえ、そりゃ、（手紙を示し）『故郷の姉』っていうのは嘘よ。でもね、その中身は真実、嘘偽りのない、桃ちゃんの気持ちなんですよ。あんないい子を悲しませるなんて人非人のすることですよ！

涼月 可愛い弟子のためなら人非人にでもなんでもなります。

奈津 古い！ 古すぎます。

涼月 江戸時代生まれの人に、古いと言われたくありませんね。

奈津 まあー悔しい。たった三（み）月と違ってないじゃありませんか。

涼月 私は明治元年、お前さんは慶応三年。江戸時代の人間。やはり書く手紙も古いですよ。第一『故郷の姉』だなんて、工夫が無さ過ぎますね。お前さん、美辞麗句は山のように知っているけど、実は、本当に好きな人に恋文書いたことないんですよ。気分が違いますよ、本物とは。

奈津 私に恋文の講釈なんかさせませんよ。自分だって本当の恋文なんて貰ったこともないやもめの癖して。偉そうに。なにさ、時代遅れ。あんな小説で大（だい）先生なら、私だって筆折らないで、二代目一葉とか名乗って小説書いてればよかったですよ！

涼月 なんてこと言うんです、この偽一葉！ 本物の恋文っていうのはね、……本物の恋文っていうのはね、後学の為に拝ませてやるけど、こういうものを言うんですよ！

仏壇の奥から、黄ばんだ手紙の束を取り出し、奈津へ示す。

涼月 見せたかないけど、友達のよしみで勉強させてやる。目のつぶれないように用心したまえ。

奈津 （じつとその手紙の束を見ているが、「あっ」涼さん、これ……）。

涼月 小菊が私にくれた、本物の恋文です。ざまあみろい、これが本当の……。

とまで言って、涼月は奈津の表情から、真実に思い至る。

右手に「小菊の手紙」、左手に「桃太郎の手紙」をたらしめた涼月は、交互

にそれを眺め、啞然として言葉に詰まる。

涼月 奈津さん……お前さん……！ これも……！
奈津 (思わず手を合わせ) 涼さん、ごめん！

奈津を見下ろす涼月。怒る以前にただ感心してしまう。笑ってごまかそうと、見上げる奈津。うなる涼月……。
道具替わり。

第二場 大黒屋

前場の三日後。十一月初めの風の夜。
火鉢が二つ。上手より友禅の座布団、脇息、派手な台ものが置いてあり、いい客が来るであろうという支度がなされている。
芸者のしめ子が上手より火鉢にしがみつき、火をつついていて。大吉は、三味線の糸を代えていたところ。桃太郎は、障子を開けて外を眺めながら小唄を歌っている。

桃太郎 佐渡の金山(かなやま)エー 佐渡の金山 この世の地獄
上がる梯子が針の山 こいと言うたとて ねえ
行かりよか佐渡へ 佐渡は四十九(しじゅうく)里 波の上

仲居のお常が膳の支度を持って出る。

しめ子 お常さん、まだなの？ そのお大尽って人。
お常 どうしちまったんでしようねえ。
しめ子 私たちはお茶ひいてるからいいけど、桃ちゃんは他にも声かかっているんでしょ？
お豆 いくら元気が売り物の桃太郎さんでも、お客もいないのに騒ぐわけいかないですものねえ。

など言いながら、下手へ去る。

大吉 ねえ、桃ちゃん、やってみた？ あれ。

しめ子 例のおまじない？

桃太郎 うん。

大吉 ちゃんと教えたとおりにした？

桃太郎 (思い出しながら) 来てほしい人の名前を、こう……へへ……小(こ)半(はん)紙(し)に書いたでしょ。それで、『来い、来い、来い、きつと来い』って思いながら真ん中へ刺したでしょ。

大吉 絹針？ 木綿針じゃだめよ。

桃太郎 (思い出し) うん、そう、それを人に見られないように弥生坂のお家の門に……私、もう、どきどきしちゃって。

しめ子 大丈夫よ。きつと上手く会いたい人が来てくれるわ。

大吉 あれ？ あんたのいい人って、住み込みの書生さんじゃなかった？

桃太郎 そうよ、立派な先生の……。あー、いけない！

大吉 じゃ、先生の方が来ちゃうんじゃないの？

お豆が表から、当の涼月を連れて入って来る。

涼月は桃太郎の人柄を見るために、大金持ちの相場師のなりをしている。派手めの着付け、羽織。金鎖。金縁眼鏡などあってもよい。

お豆 どうぞどうぞ、よくいらっしやいました。小さな店でございますので、ゆき届きませんが、はい……。

桃太郎、下座へ。涼月は由良助でもあるまいに、入るまで、半開きにした扇で顔を隠している。語調もいつもよりかなり軽やかである。

涼月 (お豆へ) いやあ、ちよつと訳ありでね。あまり知り合いに会いたくないので、そこを察してくださいよ、姐さん。

お豆 おっしやらずとも、飲み込みましたよ、はい。

三人 いらっしやいまし。今晚は。

涼月、祝儀をお豆に渡し、上座へ着く。

お豆 これはまあ、おそれいます。へへへ、あの、こちらがお名指しの桃太郎さんでございますよ。売れっ子さんでございますよ。

涼月 なるほどお前さんが。(他の三人へ) じゃ、あなた方は猿と雉と犬だ。(などと努め

て軽口を叩く)

お豆 お豆です。

しめ子 しめ子と申します。

大吉 お猿の大吉です。よろしくどうぞ。

涼月 あなたが桃太郎さんね。(まじまじと見る)

桃太郎 ありがとうございます。(あまり見られるので)どこかのお座敷でお目にかかりましたでしょうか。

涼月 あ、いやいや、初対面です。私は、人形町で相場師をやっている水戸というものなんだがね。

桃太郎 水戸様ですな。

涼月 (声を潜め) みつくといいますがね、今日は、供を連れずのお忍びなんです。お忍びだから、供がいませぬ。供がないのはみつともない、なんて言つて。(一人で笑い) そう、あなたが桃太郎さん。ほー。いえね、ある人があんまりあなたのことを褒めるんでね、是非、この目で確かめてみたいと思つて来てもらつたんですよ。勿論、眼目は遊びですから、その、ま、おついでですよ。おついで。どなたがそんな褒めてくださるのかしら。嬉しいわ。

ばたばたと気さくに入つて来る、此花。

此花 ごめんなさい。お寒うございますねえ、あなた。(涼月の隣へ座る)

お常、お酒を持って下手より出る。

此花 お豆さん、もう少し火をついで差し上げてくださいな。

お豆 はいはい、かしこまりました。

桃太郎 花魁は秋田だから、このくらいじゃ寒くないんでしょう？

此花 いいえ、冬の間は沢山着込んで、火、ぼんぼん焚いて、こんなところよりよっぽどあたたかうござんすえ。(訛りが残っている)

涼月 桃太郎さんは、やっぱり何だ、おじいさんとおばあさんに育てられたのかい？

桃太郎 (笑いながら) はい。お父つつあんつて人は、宮大工だったんですけれども、ただ人がいいだけで、友達の請(う)け判(はん)して、そこへ病氣と、よくある話で。借金のかたに、ここに流れてきた桃太郎つて訳なんです。

涼月 ふーん。苦労なすつたんだねえ。それじゃ、あれだ、やっぱりおあしが欲しかろうねえ。

桃太郎 おあし、大好きです。お客さん、相場師つて儲かるんでしょ？

しめ子 桃ちゃん。

涼月 儲かるなんてもんじゃありません。濡れ手で粟で手に入る百両。日銭(ひぜに)千両も夢じゃありませんよ。おもしろい。女が相場師をやってはいけないという法はありません。勘と度胸だ。後は元手という奴があればいい。

桃太郎 (手をひらひらさせて) 生憎、この手しかないわ。

涼月 (ちょっと意地悪く、人物を見ている) お前さんさえよければ、用意してやってもいいですよ。

桃太郎 本当ですか、お客さん。

此花 その代わり……とおっしゃるんじゃないでしょうねえ。当節は、金、金、金で、この吉原だって、色がかすんで欲ばかり。ですが、此花の前で、妙なくどきは、どうぞ、お慎みになっておくんないよ。

桃太郎 花魁、……すいません。

涼月 これは私が悪かった。ほんの御座興です。花魁も本気にとっちゃ困りますよ。嘘ほんこなんですから。

此花 (照れて) ね、お客さん。私はこの子が妹のようにかわいいんですよ。この子が初めていい人を見初めたのも、このお座敷でした。目の綺麗な書生さんで。

この頃、お豆戻って、炭を継いでまわり、そのまま下手脇に居着く。

涼月 ほー、ここで……。一丁前ですなあ。

此花 目の前で客を芸者に取り上げられたのは、初めてでしたよ。

桃太郎 ごめんなさい。花魁。もう許してくれたって、この間、おっしゃったじゃありませんか。あれはねえ、あれは、取り上げたんじゃないや。あれは……。 (うろたえる)

此花 (涼月へ) ね、可愛いでしょ？

桃太郎 いやな花魁。

此花 この桃太郎がたった一つの苦手が丸くて光るおあしというものなんですよ。だから、先刻のような御冗談には、眉が吊り上がりますのさ。勘弁してくださいよ。

涼月 金に恨みは数々ござるか……なるほど、つまりは色のために借金を綺麗にしたいと、こういう筋ですか。

此花 お相手の書生さんに、悪い鬼がついてますのさ。(一同) ねえ。

涼月 鬼……ですか。桃太郎なんだから、退治してしまえばいいのにね。

お豆 それがね、偉い物書きの先生なんだそうなんですよ。その鬼は。

桃太郎 いやだお婆さん。そんなことまで。

此花 「カガメリヨーゲツ」とかおっしゃる物書きで、近ごろ、随分と評判だそうでございますよ。ご存じですか？

涼月 「カガメ」っていうの？

大吉 そうそう、カガメですよ、カガメ。(一同へ)名前からして嫌ねえ。
しめ子 芸者を不幸せに不幸せに突き落として、無慈悲にいたぶるのが売り物なんですつて。

涼月 それ……ちゃんと読んだんですか？ その人も……。

大吉 カガメですよ、カガメ。

涼月 決して、思うほど無慈悲な人じゃないと思いますけど……。

此花 (断定的に) 鬼です。

大吉しめ子 鬼、鬼。(と頷き合う)

お豆 蛇ですよ、まむし。

涼月 (身震いをする)

桃太郎 そんなに口汚く言っちゃ、先生がお可哀想ですわ。

此花 あんたのいちばんの仇(かたき)は、金よりもそのカガメだよ。

桃太郎 「かがみ」ですつて。その方は草さんの……私の思うお方の行く末を考えて下すつてるんです。私のような芸者風情がおそばにあって、修行の身の上の障りになるのを恐れていらっしやるんです。当たり前ですわ。そんなこと。

此花 (涼月へ) 当たり前ですか？

涼月 え。……さあ、どうなんですかねえ……。

此花 お客さんも、やはり、芸者風情と、そうお思いになりますか？

涼月 いや、そんなことは……。

此花 桃ちゃんだって、私たちだって、誰が好き好んでこんな世界に身を沈めますか？ 親のため、兄弟のため、止むに止まれぬ子細があつて、みんな泣きの涙で清水の舞台から飛び降りているんでござんすよ。それを芸者風情、女郎風情、身の障りとさげすんで……(口惜しさについて情が優り) 口惜しゅうございます……。

と泣く。つられて女たちも涙にくれる。呆然とする涼月。

涼月 ……あのね、桃太郎さん。その先生を庇う訳ではありませんが……。

しめ子 庇っちゃだめですよ。

大吉 カガメなんですから、カガメ。

桃太郎 姐さん。

涼月 その先生は、大層な大仇ですが、その書生さんが望んで師匠と選んだ人なんですしよ？ あなたは、その書生を信じているのでしょ？

桃太郎 ……ええ。

涼月 ならば、その書生の仰いだ師匠も、同じように信じられませんか？ どうですかね、

桃太郎さん。

桃太郎 ……はい、あの人に信じられる方は、私にも信じられますわ。

此花 桃ちゃん。

桃太郎 私はあの人が好きだから……あの人が好きな先生だって、きっと好きになれます。先生もあの人を思ってくれている。私もあの人を思っている。どっちがいいとか悪いとかじゃないと思うの。もう、こんな話はこれでやめて、賑やかに楽しんでいただきますよ。……ね、だって、私は、芸者なんですから。

と、明るく微笑み、三味線を取る。見つめる女たち。

涼月 ……桃太郎さん、もう一つだけ。

桃太郎 ……はい。

涼月 あなた……その書生を信じ、先生を信じて、……それでどうするつもりですか？
恋文屋さん……って方が竜泉寺にいらっしって、どうか一目でもお目にかかれるようにって、いろいろ手紙を代筆してもらったりもしましたけど、……そんな未練なことを考えた私が間違っていました。私にできることは、あの人而立派な小説家になれるように、陰ながらお祈りすることだけですわ。……こんな私でも借金ごとなってお嫁に行つて……そうしたら、あの人も諦めて、一生懸命勉強できるかもしれない……。

またまた、女たち涙にくれる。涼月、苦悶する。

涼月 (思わず立ち上がり) だめです！ それはだめ！ 身を引くだの、死んだ気でお嫁に行くだの、だめ！ 私が許しません。だめだったらだめです！

一同、啞然。立ち上がった涼月をじっと見上げる桃太郎。

此花 お客さん、どうしなしたえ？

涼月 (我に返り) あ、いや、その、私は……許せない。だから、きつと……カガメも、そうしてはいけない……と思うと……思います。

此花 どうして、そう？

涼月 だってそうでしょ。大事な弟子が、心底惚れた女なんですから……カガメもこういうふうにな、どこかで、桃太郎さんのことを知りたくて、そつとお座敷へ呼んでみたりしているんじゃないでしょうかねえ。大丈夫……きつと、カガメも目を覚ましませよ。

桃太郎 (涼月を見つめ) ……そうでしょうか？

涼月 そうですとも。桃太郎さん、お前さんのお腰につけた黍団子、信じるって事の大切

さが詰まってますねえ。ありがとう、今日はなんだか、来てよかった。ねえ、花魁。信じ続ければ、思いはきつと通じますよね。きつと。

此花
そうですとも。

桃太郎
お客さん。

しきりに照れ笑いをしている涼月。

涼月
おっと、いけない。ひらめいた。閃きましたよ。相場師の宿命だ。こればかりは時が命ですからね。こうしちゃいられない。花魁、御免なさいよ。

お豆
ええ？これからですのに。よろしいんですか？

涼月、呆れる女たちを残して、逃げるように去る中、道具替わり。

第三場 奈津の家

翌日の昼。

店はすっかり模様替えされて、棚には綺麗に商品が並び、札や値段も明示されて、割り引きやおまけの紙がくつきりと目立つ。

横丁の住人、通りすがりの人たちに、愛敬を振り撒いて、新装開店の「奈津の店」を切り盛りしているきくの姿。

生き生きとして、楽しそうに應對しながら歌う。

歌⑤ 「わたしは今」 (きく)

いらっしやい またどうぞ

いらっしやい ありがとう

どんどん変わる 毎日

きのうまでは 夢のよう

忘れてゆく 日々

ほらほらきらきら 知らなかった今

こんちわ まいどあり

ようこそ またきてね

いつ以来だろう

こんなにも おだやか こんなにも 安らか
不思議な時間

お芋を作るのも 素敵

でも 小さな商い この輝きはなんだろう

知らなかったわたしに 今 出会っている

わたしは わたしを 今 生きている

わたしは今 わたしは今

客とのやりとりや、店の模様替えに忙しく立ち働しながら歌っていたきが、片付けるうちに奈津の本棚に積みあがったものが崩れてしまう。

きく わあ、どうしましょう。ごめんなさーい……。

きくは、片付ける本や書類の中に、涼月の小説を見つける。

人々は去り、一人になっているきく。ためらいながら涼月の本を手にし、思わず抱きしめる。

その本の間から、新聞の切り抜きがはらりと落ちた。涼月を扱った文壇通信のような記事である。

きくは、その切り抜きを拾い、つい読み始める。

きく ……涼さん……。

先程までの、明るい雰囲気、徐々に消え、きくが強い衝撃を受け始めていることが明かになる。立ち尽くすきく。

そこへ奈津が、近所の買い物から帰って来た。

奈津 ただ今。また、随分、飾ってくれたのね。

きく ……。

八百新さんに、川越のお芋が出ていたわよ。いいのほんとうにそろそろ帰らなくて？……どうしたのよ、そんなとこに突っ立て……。

(新聞の切り抜きをぶつきらぼうに突き出す)

奈津 ?……(受け取り)あら、これ……。

きく 涼さんが、奥さんを貰わないのは、「文壇の七不思議のひとつ」だって書いてある

じゃない。

奈津 ……ええ、そうねえ……。

きくは、前掛けなどを取り、自分の荷物から羽織を出して、出掛ける支度を始める。動揺する奈津。

奈津 ……ちよつと……ちよつと。どうしたのよ。こんな文壇のこと、おもしろおかしく書いたヨタ記事がどうしたのよ。

きく 切り抜いて、大事そうに本に挟んであったじゃない。

奈津 だって、涼さんのことだし。そりゃあねえ、友だちが書かれているわけだから、まあ……。

きく こんな新聞、川越じゃ手に入らないもの。弟子を何人も抱えた大先生が、五十近くなのにやもめだなんて。言ってもらわなきゃ判んないわよ。

奈津 ええ？そ、それは、そうかもしれないわねえ……。 (思わず、さらりと) 言わなかったっけ？

きく (激怒) 言わなかったわよ！

奈津 (さすがにひるむ) ……そう……。

きく (見透かすように) それであんたもずっと一人なんだ。

奈津 え。なに言ってるのよ！どうして、そうなっちゃうのよ！私は、関係ないでしょう？

きく (鏡に向かい、髪をなでつけ、櫛を替えたり)

奈津 (どうしたらよいか判らなくなっている) ……何、怒っているのよ。どっか出掛けるの？ねえ、ねえ、ねえ。きくちゃん。きくちゃんたら……。

きく (振り向き) どうしてはつきり言ってくれなかったのよ。

奈津 え？……別にそう、はつきり聞かれた訳じゃなかったし……。

きく やっぱり、あんた涼さんのこと好きだったんだ。

奈津 ええ？(うろたえ、かつ怒る) あんた、何言い出すのよ。私と涼さんは、紅葉門下で、鎚を削ってきたいわば競争相手ですよ。それこそ同じ釜の飯を食った兄弟弟子なんですから。男も女もないわよ。

きく 男と女でも本当の友達になれるんだって、二人のことを心底、尊敬していたのに。あんな清らかな友情はないと思っていたのに！(袂で顔を覆い)もう、いやらしい。

奈津 なに言ってるのよ！私と、涼さんは、そんな仲ではありませんよ！第一、私はあなたと涼さんが、紅葉先生のおしかりを受けて、死んだ気になって右と左に別れて行ったのを、そばにいて初めからしまいまでこの目で見てたんだよ。(だんだん激してくる)涼さんがああして大先生にまで出世できたのも、ずっとあんたの面影を忘れなかったからじゃないか。涼さんに聞いてみなさいよ。笑われるだけだから。

きく よし。じゃ、聞いて来るわよ。

奈津 よしって、なによ。ねえ、ちよっとお待ちよ。

きく ここへ来て、もう一月も待ってたのよ。なっちゃんを信用して、草助のことまかせつきりにしてたけど、これじゃ、埒が明かないはずよ。

奈津 涼さんに会って、どうすんのよ？

きく お久しぶりでございます。私はこうして生きておりました。草助は、あなたと私の子ですって、そう言うのよ。

奈津 ま……。

きく 隠しておくことなんかなかったのよ。そうよ。紅葉先生も、うちの人もみんな死んじゃったんだし、涼さんに奥さんも子供もいないとなったら、誰に遠慮がいるって言うの？ だいたい、私とあの人の子供なんだから、息子だって名乗らしてやるのが当たり前なんだわ。小説だって、きつものになるわ。あの人の子なんだから、そうでしょう？

奈津 う……。

きく じゃ、行ってくるわよ。いいわね、なっちゃん。

奈津 ……。(かすかに頷く)

きく、どたどたと門口を出る。

きく (振り返り) ……行ってきます。

奈津 ……。(消え入るように) 行ってらっしゃい。

きく、瞳を輝かせて下手へ走り去る。

呆然と見送るしかない、奈津。泣くに泣けない淋しさ。

暫くぼんやりときくの荷物や、掛けてある着物を見ている。思わず、きくの鞆を蹴飛ばしてみる奈津。

……よけい悲しくなってしまった。座り込む、奈津。

揚幕より、涼月が小走りに出る。門口で少しためらっていたが。

涼月 (息を整え、動揺を見せないように) 今日は。……奈津さん、私です。

奈津 (びっくりして) 涼さん！

涼月 (縁先へ廻りながら) いやね、実はちよっとお前さんにね、その……草助います？

奈津 (言葉を探す) あの……今……その……そこで、会った？

涼月 草助のやつ、やっぱりここでしたか。

奈津 草助さんが？

涼月 昨夜から戻ってこなかったから、あわてちまって。

奈津 え？

涼月 あの二人、桃太郎のことをね、許してやろうと思いましてね。どこ行ったんです？

奈津 え？……まあ。(手を振って) 違う、違う。

涼月 え？

奈津 違うのよ、涼さん。……会ったってきいたのは……きくちゃんの事よ。

涼月 ええ？

奈津 きくちゃん。小菊さんに、そこで会わなかったの？

涼月 ？……というと？

奈津 きくちゃん、あなたに会いに行くって……それで……今、たった今よ……。

涼月 ちよっと待っててくださいよ。そのきくちゃんというのは、どこのきくちゃん？

奈津 小菊ちゃんにきまつてるじゃないの！

涼月 ……小菊……ちゃんって……あの、小菊？

奈津 他にどんな小菊がいるってのよ！涼さんが死ぬほど惚れた、あの小菊よ！

涼月 ……小菊が……どこに？

奈津 今の今までここに！それで、今、だあって出てったとこ！

涼月 (眉をしかめて)……二十一年間、お目にかかってませんがね……。今頃になって、

迷って出てましたか？

奈津 そうじゃないんだってば！ 生きてたのよ！

涼月 え？

奈津 死んじやいなかったのよ、小菊ちゃん。川越でずっと元気で暮らしてたんだって。

死んだっていうのは嘘だったんですって。

涼月 ええ……ええええ！

奈津 そうなんですよ。大分変わっちゃったけど……。

涼月 えええ……小菊が、生きていた……？

奈津 一月ほど前に、草助さんのことで、家(うち)を訪ねて来て、そのまま……。もうみんな言っちゃまうわよ。草助さんは、あなたときくちゃんの子なんだって。

……(ちよっと考えて) ええええええ！ 草助が！ ……ええええ！

奈津 それで、今、弥生坂の、涼さんそこへ行くって……。

涼月 そ、草助が……私の……。

奈津 私も、もうびっくりして。

涼月 ほんとですか、それ？

奈津 こんな時に、そんなややこしい嘘つくわけないじゃありませんか！

涼月 なんて、知らせてくれなかったんです？

奈津 いろいろあったんだって、あっちも。

涼月 そうじゃありませんよ！一月も……一月も前からここにいたんなら、どうして一

言私に知らせてくれなかったんですか！ しかも、草助が……私の……。

奈津 だって、そんな……怒らないでくださいよ。私だっていろいろあって……。 (泣きたい)

涼月 いろいろ何ですか！

奈津 二十一年間、死んだことになってる人を、そうそうお手軽に、生きてました、よかったですね、はいつて、出す訳にいかないじゃありませんか。みんなをびっくりさせないように、いろいろ段取りつてものがあつて……。

涼月 もう、十分びっくりしてますよ。

奈津 どうせ、みんな私が悪いんですよ！

涼月 そういうことじゃないでしょ！

奈津 そうよ、そうよ、みんな私のせいですよお！

涼月 だから……！

と、叫び合っているところへ、上手より、あたふたとしめ子と大吉が駆け込んでくる。

しめ子 先生！

大吉 一葉先生！

奈津 今、取り込み中なの！

しめ子 たいへんなんです！

奈津 こっちだつて、たいへんなの！

大吉 ほんとにたいへんなんですつてば！

しめ子 桃ちゃんがね、草助さんの使いつて人に呼ばれて、出てっちゃったんです。

涼月 草助いたのか！ どこに？

しめ子 あら、いつぞやは。

大吉 水戸様。

奈津 誰れ、それ。

涼月 さあ。

奈津 どこが「たいへん」なのよ！ただの逢い引きじゃない。

大吉 違いますよ！草助さん、山下の賭場で騒ぎ起こしたんですつて。

涼月 賭場だ？

奈津 博奕やつてたの？あの子。

しめ子 で、桃ちゃんに、上野の森へ来いつて。

奈津 なに考えてんのよ、まったく。

涼月 あの大馬鹿者……上野の、どこです？

しめ子 五時に、弁天様へぬける石段の下だつて言つてました。どうしましょう、まず一葉

先生にと思って……。

涼月 弁天様へぬける石段の下だな？（時計を見る）

奈津 涼さん、行きましよう！

一同、あたふたと花道へ出る。

奈津 （二人へ）あ、あんたたちは、ここにいてね。

大吉 だって、桃ちゃんが……。

奈津 きくちゃんって人が帰って来たら、すぐ戻るからって、必ずそう言って待っててもらってよ。

涼月 きくちゃん！そうだ、小菊ー！

奈津 いなかったら必ず家に戻って来ますから。着るもんだってみんなおいてあるんだから。

涼月 そうだな。そうか。草助ー！

奈津 必ずね！ きっと待って貰って下さいよ。

しめ子 は、はい。

涼月 先に行きます！（行きかける）

奈津 （その背中へ）二人に、もしものことがあったら、涼さん、あんたの所以ですからね！

涼月 え。

奈津 心中でもしたら、涼さんの所以ですからね！

涼月 （ぎくつとなるが）判ってます！

奈津 涼さん、待って。ちょっと、涼さん、待ってよ……。

涼月、花道を駆け込んで行く。

泣きながら続く奈津。

見送るしめ子と大吉を見せて、道具替わり。

第四場 不忍池

前場の暫く後。夕暮れ。

桃太郎が心配そうにうろろうろしている。

上手の石段より、忍ぶように草助と片桐、馬場が出てくる。三人とも、髪も着付けも乱れ、かなり走り廻った様子で息が上がっている。

草助 (低く呼ぶ) 桃……。桃……。

桃太郎 草さん！

片桐 (唇に指をあて) しーっ。

桃太郎 草さん、どうということなの、これ？

片桐 でかい声出すなよ。

桃太郎 でかいのは地声です！ 片桐さん！ あんた、また草さんを悪いところへ引っ張ってっただのね。馬場さんまで！

草助 (手を振り振り) 違う、違う。俺が自分で行くって……。

桃太郎 博奕を？

馬場 どうしてもって、頼まれたものだから。いや、私も止めたんだけどな。

草助 つい頭に血がのぼっちまって。

馬場 (指をさし) 「あ、ずるい！ いかさまだ！」 って。

片桐 ほんものの馬鹿。

馬場 いくら負けても、ああいうのは、禁句ですよ。

片桐 あんな所でそんなこと叫べば、どうなるか判ってるだろうが。全く、もう。

桃太郎 ……呆れた。草さん、そんなことまでして……。

馬場 責めんでやってくれ。初めてにしては、なかなかいい張り方だった。

桃太郎 そういう問題じゃないでしょ！

「いたぞ」などの声がして、山下の増三の子分、重、えい公、次郎、ばらと出てくる。遅れて増三。
身を硬くして集まる片桐たち。

馬場 増三さん。この通りです。ここは私に免じて。どうか。

片桐 いやあ、ほんのご愛嬌ですよ。ご愛嬌。この二人に。ちよつと、逢い引きの約束があったもんですからね、こつちを先にすませておいてからと……。

重 (聞いていない。片桐の頭をぼかりと殴る)

馬場 (重を制して) おい。乱暴はいかん。

片桐 いやあ、これはご挨拶ですなあ。ははは……。

えい公 挨拶ってえのはな、こういうのだ(殴る)。

草助 (前へ出て) 止める！ もう逃げも隠れも……！

次郎 (皆まで聞かず、草助もぼかり)

片桐 こうなったら俺も男だ、じたばたしねえから……。

自分たち、いきがる二人を全く斟酌せずにぼかぼか殴る。止めようとする馬場も殴られる。桃太郎、止めようとするが、弾き出される。

桃太郎 (増三の所へ行き) 親分さん! もう許してあげて下さい。勘弁してやって下さいよ!

増三 よし、連れてきな。ゆっくり締めて、性根を改めさしてやる。自分たちへい。

ころがつてうめいている三人を、自分たちが立たせ、連れて行こうとする。桃太郎、割って入り、

桃太郎 止めて! 止めて下さい!(下駄を脱いで、重の頭を殴り飛ばす) 若い娘が止めてっってお願ひしてるんだから、止めとくもんだよ、この唐変木!

草助らあわてて桃太郎をなだめる。

草助 桃ちゃん!

馬場 いかんだろ、それは……。

重 こいつ、どこの芸者だ?

増三 いい度胸だが、怪我しねえうちに引っ込んでな。

増三がこなし、男たち、本気になる。
そこへ、上手より涼月が走り込んでくる。驚く片桐たち。

涼月 待ちたまえ。まあ、待ってくれたまえ。

馬場 先生……。

えい公 何だ、お前え……。

次郎 親分!

涼月 名乗るほどの者ではありませんが、私はすぐその、弥生坂に住むもの書きです。この者たちは私の弟子です。仔細は弁えませんが、この者たちの不祥事なら私の教育の未熟のしからしむるところです。どうか、何分にもご容赦願いたい。このとおりです。

草助 先生!

片桐 すみません。

馬場 申し訳ありません!

涼月 ……草助。

涼月は、草助を見つめる。が、とりあえず片桐を殴る。

涼月

君たちが人生を賭けるのは埃まみれの賭場にころがるサイコロですか！ 私はつくづく情けない！ 運否天賦、君らが命を賭けるのは筆一本ではなかったのですか！片桐！

片桐

はい！

涼月

馬場までついていながら、なんということですか。

馬場

はい！

涼月

……草助！

草助

はい！

涼月

(ぼかり) 大馬鹿者！

重

妙なのがしゃしゃり出てきやがったなあ。素人は引っ込んでな！

と、殴り掛かる。涼月はステッキで足を払って、睨みをきかせ、

涼月

何をしやがる。おい。どんな間の抜けたひょうたくれでも、あいては玄人だと思っから、こつちも素人らしく両手について挨拶しているんだ。お前たちのようなお調子者じゃ、礼も仁義も切るだけ無駄かい？ どうで、乳母(おんば)日傘の書生を鴨の、持ち上げておいて突き落とし、身ぐるみ剥ごうっていう、はなっからの筋書きだろう？ 穴にはまったこつちが間抜けなんだから、野暮はいいっこなしと見して、このとおり頭を下げるんだ。そつちも見えすいた芝居はよしにして、お目当てはこれこれと私が代わって受けようから、さ、いくらだい？ 足りなきやつけ馬の二頭や三頭引いて行きます。さ、これでどうだ？

と、ボンと札入れを放る。子分、気圧されているが、おずおずとそれを改めて、増三の顔をうかがう。

増三

へへへ……素人が聞いてあきれるなあ。

涼月

え。

増三

そうさなあ……ふた昔も前になるかね。ここいらで、滅法啖呵のうまい書生の博奕打ちがいたもんだっけが。へへへ……。

涼月

書生の？……いや……それは、ほほう、珍しい。

増三

まさかこいつらの先生がね。へえー、師匠が師匠なら、弟子だなあ。まあ、あまり旧悪は言いますまいよ。(掌で財布の重さを確かめ)へへへ……おい、書生さんよ。

弟子たちはい……。

増三 もう、ここで危ねえいたずらは止(よ)しにするんだね。いいですかい。お前さん

方には、この先生みてえな博才はねえんだから。(子分へ) 行くよ。

子分たちへい。

増三、懐手で、思い出し笑いをしながら去る。

涼月を見上げる、弟子と桃太郎。しきりと感心。

威厳を保ち続けたい涼月、……が、苦しい。

草助 へえー。

桃太郎 (涼月へ) ……やっぱり、先生だったんですね。……じゃ、私たちのこと……。

涼月 う、うむ。(頷く)

桃太郎 (にっこりして、ぺこりと頭を下げる) ありがとうございます、先生!

涼月 (制して) しーっ、しー。

弟子たち? (見つめる)

涼月 ソバ屋の二階に居候して、一年中博奕を打って暮らしていたよ。ひどい荒(すさ)み方だった。

馬場 ああ、それで、長いものや埃っぽいものは遠ざけていらっしやったんですか。

涼月 あれで小菊に会わなければ、あの人たちと同じ人生を歩んでいたかもしれないなかつた……(と、感慨にふけたが、急に怒りがよみがえる) 草助! お前たち!

弛緩していた弟子たち、急に身を縮める。

弟子たち (口々に) 申し訳、ございません!

涼月 だいたい何です、この様(さま)は! 三人、そろいもそろって!

と、叱り始める少し前、下手より、涼月に会えなかつたきくがしよんぼりと戻ってくる。怒鳴りはじめた涼月の声に、ちよつと身をかがめて舞台前を通り過ぎようとする。

涼月 (きくが怖そうに顔を伏せるので) あ……これは、えへん……いや、失敬。

ちよつと顔を上げたきくと涼月は、顔を合わせた。

……が互いにそうと気がつかない。きくは、会釈して、関わらないように石段へ抜ける。

桃太郎は、草助の傷を拭いているので気づかない。

上手より、奈津がよろよろと出てくる。

奈津 あ、いた、いた。涼さん、まあ、片桐さんたちも……。

片桐 一葉先生。

涼月 奈津さん、そんなに走らなくても大丈夫だったよ。

きく ? (石段の途中で振り返る)

奈津 (弟子たちのそばへ寄って) そうでもなさそうね。

馬場 いや、なんでもありません。

奈津 草助さん!

草助 すみません!

片桐 なんてみんな集まって来ちゃったんだ?

桃太郎 (奈津の手を取り) 先生!

奈津 よかったあ。ああ、苦しい。涼さんたら、おいてきぼりにするんだもの。

きく (石段から、そろそろと降りて来て) あのー、涼……さんって……。

草助 母さん……。

弟子たち母さん?

涼月 ……母さん? (きくをじっと見つめるが) ……小菊……?

きく ……(草助へ) 涼さん?

草助 涼月先生です!

きく ……(草助へ)ほんとに……、加賀美涼月先生?

草助 嘘ついてどうするんですか。

涼月 ……きくさん?

涼月もまた、二十年前より、ぐっと太っていたのだ。

きく あんなに、細かったのに……!

涼月 え? そんなに……?

きく 全然、違う。いいえ。そんなことない。ああ、涼さんだ。ああ、確かに……。

涼月 ……そんなに、変わりましたか……。

草助 母さん、知ってるの? 先生のこと……。

きく そりゃあそうだよ。だって、お前の……。

とまで口にして、きくは、はっとして涼月を見る。

涼月 (つとめて冷静に) そ、そうなんだってねえ。さっき、奈津さんから……。ね……。

奈津 ……(こっくり頷く)。

きく (それを見て) あ、はい。ええ、実は……、そうだったんです……。

涼月 (何度も頷き) うん、うん。そうか。うん……。

草助 (あっけらかんと) なんだ、そうならそうと言ってくればよかったのに！先生と知り合いだったなんて。ああ、参ったなあ。だったら、あんな、ばさばさになって門の前に座り込むことなんてなかったのに。母さん、どうして言ってくれなかったんだ……いや、(涼月へ向かい) 先生、改めて御挨拶致します。母でございます！あ、ああ。そうだってねえ。

涼月 先生がご存じだったとは、まったく知りませんでした！母さん、さっきからなんだよ。ちゃんと先生にお礼を申し上げてくれよ。きちんとさ。いくら知り合いだからって。

きく え？ええ、そ、そうね。涼月先生、あの、件が、この度は、いろいろお世話になりました、真にありがとうございます。

涼月 いや、世話だなんて。それは、当たり前のことですから、あの……。

二人 (つい同時に) 草助……。

きく あの、実は、その、あのね……。 (言葉を探す)

涼月 (なぜか相槌を打っている) ああ、はい、はい……。

きく 実は……。

草助 (じれて) すみません！もう、田舎の者ですから、「ああ」だの「うう」だのばかりで。先生、こんな母ですけれども、私と子ども、よろしく願います！う、うむ……。

草助 幾久しく、お導きを！

涼月 うむ。

おおように頷く涼月。きっかけを失ってしまった涼月ときく、ため息をつく。

奈津 (悄然と眺めていたが、見かねて) あの……草助さん。実はね……。

草助 一葉先生！先生も教えてくれればよかったのに。ご存じだったんでしょ？母と涼月先生が、知り合いだったって。

奈津 え、ええ。それは、よつく……。

草助 なんで教えてくれなかったんですか？もう、意地悪だなあ。

奈津 それはね。それは…… (こちらも言葉を探す)

馬場 (断定する) お前のためだ。

草助 え？

片桐 お前みたいな世間知らずの甘えん坊に教えてみる。妙に懐かれて、先生だって今みたいに遠慮なく叱れなかったぜ。

草助 そうかあ。

馬場 一葉先生の、この有り難い御配慮が判らんのか？

草助 はい……。

片桐 だったら「意地悪だなあ」とか、友達みてえな口きいてるんじゃないやねえぞ。馬鹿。(草助の頭を、奈津の方へ下げさせる)

草助 (奈津へ) お心遣い、有り難うございました！

奈津 ……いいのよ。私だって、その(涼月ときくに見られているので)わざとそうしたわけじゃ……ないんだから……。(尻すぼみに小さい声) ねえ……。

にこやかにそれを眺めていた桃太郎は、

桃太郎

一葉先生！涼月先生！お騒がせしました。草助さんのお母様！草助さん、こんなにみんなに心配してもらって、お幸せですよ。安心して下さいね。(皆へ) 有り難うございました！(深くお辞儀をする)

草助 桃ちゃん……。

馬場 (草助の頭を下げさせ) 君がすることだ。

桃太郎 (草助へ) じゃ、私、行くから。

草助 どこへ行くの。

片桐 暮れてんだろ。お座敷に決まってるじゃねえか、馬鹿。

涼月 (桃太郎へ) 安心して、しっかり働きたまえ。信じていれば、必ず道は開けるから。

桃太郎 はい！

桃太郎、また頭を下げると、ぱたぱたと走り去る。

見送る一同だが、片桐が弟子たちに目配せして、

片桐 それでは、私たちも自分の責務に戻ります！

弟子たち有り難うございました！

脱兎の如く、逃げるように去る弟子三人。

残された涼月、奈津、きく。なんだかとても疲れた気がして、それぞれにため息をもらす。

水鳥の声。そうして、改めて、しみじみとお互いの変わりようを見つめ合う。

そんな中、道具替わり。

第五場 加賀美邸

前場の翌朝。

加賀美邸のいつもの朝の風景。澄み切った秋の空気。

お筆は花を生け、仏壇回りをていねいに拭いている。友繁は庭の掃除をしながら、のんびり庭草など眺めている。

馬場は、下手の机に向かい、いつもの校正を続けているが、中央のテーブルで将棋盤を睨んでいる田熊の相手に時々立つ。

玄関の鈴がせわしなく鳴る。

お筆 (誰も出る様子がないので) 玄関番！

馬場 友繁。

友繁 僕はもう卒業しました。草助！ 草助！

馬場 とつとつに出掛けていますよ。

友繁 僕はいつも一番損な役廻りのような気がするんですけどねえ。

友繁がぶつぶつ言いながら玄関へ行きかけると、「文芸倶楽部」の谷初子が元氣よく入ってくる。

初子 おはようございます、皆さん。いいお天気でございますね。こんな秋の朝は、身体

の芯から透き通ってゆくような気がしますわ。

友繁 初子さん。上達なさいましたね、文章表現が。よいです、よいです。

初子 ごめんなさい、玄関番さんを無視して上がって来たりして。

友繁 僕は、もう玄関番などではなくですねえ……。

初子 (瞳を輝かせ、声をひそめて) 先生は？ まだ夢の中でいらっしやいますの？

馬場 お目覚めになっていらっしやいます。

初子 先生のお休みになってらっしやるお姿ってどんななんでしょう。お釈迦さまのようかしら。

お筆 何、朝からつまんないこと言ってるんですよ。(友繁へ) 先生が降りてらっしやる前に、ほこりの立つ仕事は終わらせなければだめじゃありませんか。あなたもこんな安香水の匂いふりまかないでくださいよ。蛾ですね、まるで。

初子 まあ、フランス土産ですよ、これ。

お筆 原稿をとりそこなってもよろしいんですか。

初子 それが、もう締め切りは十日も過ぎてるんですよ。

下手から雑誌を眺めながら、楊枝をくわえた片桐が出てくる。顔には膏藥が貼ってある。

片桐 「透いて好かれて 会えない夜は 十日二十日も今日のうち」ってね。序の口、序の口。

お筆 片桐さん。反省の色が皆無ですわね。

片桐 (将棋盤を覗き) ほとんど残っていないじゃありませんか。

田熊 君より数段上だけ。

初子 本当に先生、香水お嫌いかしら。

田熊 これでどうだ! (打つ)

初子 どうしましょう。(友繁へ) ねえ、どうしましょう。

馬場 (立って来て、打って戻る)

片桐 詰みだ。

田熊 え。

正面階段より、出掛ける支度の済んだ涼月が降りてくる。

皆、各々に居住まいを正す。

一同 おはようございます。

涼月 おはよう、お嬢さん。

初子 お嬢さん! 私、夜討ち朝駆けですっかり先生に嫌われてしまっているのじゃないかって、とても案じておりましたのよ。(お筆へ「ざまあみろ」の表情をとぼす)

涼月 どうしてこの私が、あなたのようなうら若き才媛をうとんじる理由がありますか?

(お筆へ「帽子」と、こなす)

初子 (うっとり) 夢見たいですわ。

涼月 片桐。

片桐 (神妙に) はい。

涼月 常日頃からな、弟子の中ではお前が最も才能があると私は思っている。横浜日々新聞に連載の話が決めてある。書き溜めたものから、何か選んでおきたまえ。夜、構想を聞こう。

片桐 はい!……有り難うございます。

涼月 うむ。お前の筆には、嘘がない。得難い才能だ。精進しろよ。

片桐 (深く頭を下げる)……はい。

涼月 お筆さん。お嬢さんへティーだ。ビスケットも。(初子へにっこり笑って、出てゆく)

田熊 お早いお帰りを。

涼月 うむ。

弟子たち、見送るために下手へ追う。

弟子たちの声 行つてらっしゃいませ。

涼月の声 玄関掃いたのは誰だ！

友繁の声 すみません！

初子 (やっと気づき、あわてて) 原稿！ 先生！ 原稿下さい！ 原稿！

田熊 馬場君！もう一番！ね、もう一番だけ！

初子 田熊さん、いいんですか、そんなことしていて！

弟子たち戻り、賑やかなまま、道具替わる。

第六場 奈津の店

続く時刻。

浅吉老人が玄関先の菊に水をやっているところ。たみは淋しそうに、店先の商品を丁寧に揃えている。

上手の部屋はきれいに片付けられ、おきくの信玄袋と籐籠がきちんとそろえて置いてある。雀の声。

浅吉 そろそろこつちも支度しないといかん。

たみ もう？

浅吉 私らもこんな日に引越したくないんだがなあ……。

たみ あーあ、行きたくないなあ、横浜なんて。

奈津、きく上手より戻ってくる。きくは川越へ帰る支度をして、世話になった隣近所に挨拶を済ませて来たところ。

きく 私一人で近所の挨拶くらい行かれるっていうのにおせっかいなんだから、もう。

奈津 そうはいかないわよ、家(うち)の客なんだもの。(入ってくる)あらまあ、あなたたちのほうが大変なのに、すみませんねえ、ばたばたさせちまって。

きく (二人へ頭を下げる) おたみちゃん、楽しかった。しっかり働いて、親孝行おしよ。
たみ きくおばさんもあたしもいなくなつて、先生大丈夫かなあ。

奈津 心配してくれるの、嬉しいねえ。

たみ だって先生の勘定、どんぶりなんだもの。

奈津 まあ。(皆とともに笑う)

浅吉 (懐から薄紙に包んだ簪を取り出す) 先生にね、おこがましいんですが、
これを受け取っていただこうと存じまして。

奈津 まあまあ、そんなこと……。

小さな包みを開くと、朱鷺色の花簪。

きく かわいらしいねえ。

奈津 ……これを私に？

浅吉 それは、樋口さんの、亡くなられました一葉先生が、お買いになりたがっていたもの
のなんでもございますよ。

奈津 一葉先生が。

浅吉 はい。家の前を通るたびに、おあしがたまつたらこれをかうんだって、いつもおつ
しゃつてございました。あんなに早くお亡くなりになるんでしたら、そのまま持
つて帰っていただくんだったとずっと悔やんでおりました。これもご縁でござい
ますから。

奈津 一葉先生がこの簪をねえ。ありがとうございます。大切にしますよ。ありがとうございます。

浅吉 それでは、お二人とも、ずいぶんとお達者で。

奈津 はい。はい。

幾度も頭を下げて、去つてゆく二人。奈津、店先の手近なお菓子をわしづ
かみにして、おたみへ押し付ける。

奈津 横浜なんていつでもね、今は汽車に乗ればすぐですからね。また、遊びに来て下さ
いよ。いつでもね。きつとですよー。

奈津、門口で二人を送り出す。

きく ……なんだか別れにくくなつちやつたなあ。

奈津 ……本当に怒つてないの、あんだ。

きく うん。

奈津 何もかも、最初にみんな話してしまつたらよかつたんだね。きつと、そうなんだ。

(泣きそうになりながら)

でも、……男ってずるいね。「ごめん」。これだけよ、あの人。

奈津 それだけ？

きく それだけ。

奈津 本当に、……それだけ？

きく (ちよっと笑って) 馬鹿ねえ、そりゃ蓮玉庵に入ったんだもの、いろいろ世間話して、ちゃんとお蕎麦くらい食べさせて貰ったわよ。

奈津 ……何、話したの？

きく (笑って) ……そうねえ、もし東京に出ることがあって、あの人とぼったり出会っ

たら何て言おう……って、二十一年間、時々、そんなこと思ってたけど、いざとなると朝になったら忘れちゃうような、とりとめのない話ばかり。あの人は文士仲間のこと。……私は……川越のこと、おいしいお芋の作り方……。後は草助のこと。なっちゃんが心配するようなことは何も出なかった。

奈津 そんな……いやだ。

きく 「涼さん、何考えてるのかしら」って、あたしが上目使いで盗み見るとね、あの男、お煮染め食べながら、ちよろって人の方見て、ニヤってすんのよ。

奈津 ニヤっとしたの？

きく うん。その時判ったんだ。あの人の言う「ごめん」っていうのは、長い間苦勞をかけたっていうことじゃなくて、昨日不忍の畔(ほとり)で目と目があったのに、いっぺんで気がつけなかったことなんだなって。だからあたしも「ごめん」って言ったの。あたしだって、あの人のことわからなかった。やっぱり、いざとなると駄目ね。自分で自分に呆れちゃった。

奈津 そんなに変わってたかしら、あの人。

きく そばにいと判らないものらしいよ。

きく、懐から、いとおしげに二十一年前の涼月の写真を出し、見る。

奈津 ……涼さんの？

きく うん。(渡す)

奈津 ……(じっと見て) これ……涼さん？

きく 紅葉先生のところへ弟子入りが叶った記念に撮ったんですって。玄関番の。

奈津 ほんとに、涼さん？

きく ほんとよ。

奈津 ガリガリ。糸とんぼみたい……。こんなだったっけ？

きく 写真の中の人は、いつまでたっても変わらないけど、生きている人は違う。別に恥ずかしいことでもなんでもないさ。変わってゆけるってことが生きて来た証しな

奈津 んだもの。それでいいんだ。なっちゃん、あんただってずいぶん変わったんだよ。え？ 私が？ 変わっちゃいませんよ、私なんか。だって、なんにもないもの。変わるようなこと。

きく (優しく微笑んで) 出て来てよかった。ありがとう。

奈津 あんたにお礼言われるようなこと、何も出来やしなかったじゃないのさ。かえってじゃまばっかりして、私ってほんとうに嫌な女よね。だからいまだに一人なのよ！

(泣きそう)

きく ……あたしだって、一人だ。

奈津 あ……。

きく ……ね。

奈津 ……きくちゃん。

きく なっちゃん。

二人、抱き合って慰め合う。

きく ……草助のこと頼んだわよ。

奈津 うん。うん。

きく それから、今朝頼んだ、あの人への手紙、うまく代筆して渡しといてね。

奈津 ……うん。

きく じゃ……行くわ、私。

きく、荷物を両手に提げ、門口へ出る。遠く百舌の声など。奈津は仏壇の写真を持ってくる。

きく ここもいっぺんに淋しくなっちゃうわね。

奈津 でも、なくしたと思っていた大切な友達が、帰って来たんですもの。淋しくてもへっちゃらだわ。(写真を渡す) これ、記念に持ってて。あそこに入れてくわけにもいかないし。

きく (受け取って、見る) うわ、可愛い。ほんとこれ、私？

奈津 二十一年前の、大切なきくちゃん。(きくの両肩に手を置き) 二十一年後の、大切な大切なきくちゃん。

きく ……ありがとう。大切な大切ななっちゃん。……私、へっちゃらだよ。本当の友達って、二十年くらい会わなくても、なんでもないんだね。こういうことばっかりは、それだけ生きてみないと決して判らないんだね。……よし。

心を決めて、去りがたい路地を花道へ出る。

きく
ついたら、私の今の写真、送るよ。(写真をひらつかせ)こっちじゃないよ。今の本当の私を、いつも見ててね。(帯を叩き)よし! 元気で、一所懸命、これまでより、もっともっと、私らしく生きてゆくんだ。じゃ。

きく、眉を上げて、凜として、胸を張って力強く揚幕へ去る。

一人見送る奈津。

奈津
(手を振り)気をつけてお行きよ!。またおいでね。着いたら必ず手紙を頂戴……。

と言って、ふと言葉につまってしまう。門口の「手紙かき□(ます)恋文屋」の木札の看板を見上げて、強い寂寥感に襲われる、奈津。

思い切って看板をはずそうとする。……が、はずれそうではずれない。

マフラーを小粋にまいた涼月が、下手より出て、奈津の悪戦苦闘を眺めている。

奈津
(気づいてしばらく言葉を探すが、良い言葉が見つからない。恥しさと照れで、妙につっけんどんになってしまう) ちょっと見てないでさ、手伝って下さいよ。

涼月
(微笑んで) どうして?

奈津
どうしてって、人の恋路の邪魔するような恋文屋は、犬に食われて死にしまった方がいいんですよ。

涼月
草助と桃太郎には結びの神だ。

奈津
見送りにいらしたんじゃないんですか。そんなところで盗み見してないで、さっさとせり出せばよかったですじゃありませんか。

涼月
キツカケがなかった。

奈津
どうしてそう間が悪いんだろうねえ。(まだ看板を取ろうとして取れない。苛立つ) ううん、もう!

涼月
恋文屋を続けなさいって御仏のお諭しだよ。

奈津
諭されたって、もう、出来やしませんよ、こんなこと。

やっとはずした看板を抱き締めたまま、家の中へ逃げ込む奈津。

涼月
何をそう怒ってるんだい?

奈津
自分で自分に怒ってるんです! 私はずくづく、意地悪で役立たずなわがままな困った女だって、身に染みて腹立たしいんですよ!

涼月 ……小菊のことかい？

奈津 ……。(頷く)

涼月 ……二十一年間、私はあの人の昔の倅(おもかげ)にしがみついていたんだねえ。心を閉ざして、悲しい恋の痛みを繰り返して自分の小説に仕立て上げて、自分でその痛みをもてあそんでいたんだね。……よく考えたら、ずいぶん失礼な話じゃないか。相手を見ている振りをしていながら、その実、本当は、その人をちっとも見えてはいなかったんだからね。……私の大事にしていた恋文は……。(微笑して) ……あなたを責められる人は誰もいませんよ。

奈津 (泣きたいのをこらえ) これ……。

奈津、机の上にあった、封筒に入った巻手紙を差し出す。

涼月 何ですか？

奈津 ……手紙。

涼月 奈津さんから？

奈津 (首を振る)

涼月 小菊ですか？

奈津 (頷く)

涼月が手紙を開くと、中はただ白紙である。涼月の手から、はらはらと地摺りにこぼれるただ白い巻紙。

涼月 ……これは？

奈津 きくちゃんに、今朝、あなたによろしく、……って、ちよろちよろっと書いといてくれて言われたけど、今度ばかりは書けなかった。……あたしには……書けなかったんだ。

涼月 ……(白紙を見つめ)言葉にならない言葉、書き尽せない思いって……。やっぱり、あるんですねえ。お菊さんの思いと、奈津さんの心が見えない文字で書かれているようだ。ありがとう。

奈津 涼さん……。

奈津、深々と頭を垂れる。涼月、優しく奈津の手を取って、起こす。
下手より、草助と桃太郎が小走りに登場する。

草助 あれ、母さんは、もう？

涼月 間の悪い奴だなあ。

奈津 今さっきね。あんたのことを頼むって、ね。

草助 (桃太郎へ) ちえ、照れ隠しなんだぜ、きつと。

桃太郎 きちんとご挨拶をしたかったのに。残念だわ。

涼月 俺が許す。そのうち二人で川越へ行ってくるといいよ。

桃太郎 え！ありがとうございます、先生！

奈津 (涼月へ) 今日は滅法いい男だねえ。

涼月 (奈津の手を取って) さあ、私らも行こう。

奈津 え？ どこへです？

涼月 連載。例の白妙と香月の話。やっぱり別れたままがいいんですか？ 現実

小説は小説でちゃんと弁えてるつもりですがね。それには腹ごしらえだ。池之端へでもどうぞです。

奈津 又「ごめん」ですか？

涼月 え？

奈津 (笑って) 何でもない。

草助 先生！

涼月 編集を丸めこむのも修行のうちだ。後はよろしく、これにて御免。あ、ちようどい

い、桃太郎。草助。

桃太郎 はい。

涼月 おきくさんへの御挨拶を、ここで書かせて貰いなさい。草助に手伝ってもらってな。

二人 はい。

涼月、奈津の手をひっぱって下手へ。

桃太郎は机のうえで墨をすり始める。草助は座敷に置きっ放しの看板を

「？」と持ち上げ、無造作に元のように軒下へ下げる。

奈津 ちよつと、ちよつと、……草助さんには、あのこと？

涼月 今のあの子には、情にほだされ易い父親より、怖い師匠が必要なんだ。それに、頭を冷やしてみると、実の父親だなんて、今更軽々しく名乗り出られるものではない。朝鮮で亡くなったお父様に対しても、家族の皆様にも失礼だろう。彼には彼の、二十年間の暮らしがある。いつか、ゆっくり話し合う時が来ることだろう。

奈津 そうですなえ。きくちゃんと、草助さんと、育てて下さったお父さんたちの二十年間がねえ……。

涼月 うむ。(奈津の胸元の簪に目をとめる) どうしました、これは？

奈津 え？ あ、これ、一葉先生の形見……のようなんですって。

涼月 へえー。(しばらく眺めていたが、思いついて、お奈津の髪にさす)

奈津 やだ、やだ、涼さんたら、ちよつと、恥ずかしいわよ。やめてよ。みっともないじ

やありませんか。ちょっと、嫌だつてば。

涼月 (構わずさして) いや、悪くありませんよ。

奈津 だって、そんな、幾つだと思ってるんです? ほんとに、もう。

涼月 本物の一葉さんも……春のような恋をして……長生きしたかったんでしょね。

奈津 そう……そうね、きつと。

涼月 (簪を挿したお奈津をつくづくと見て) ちょっと曲がってますね。(と直し) ほら、
ここだけ先に春が来たようです。

草助は桃太郎の手に後ろから手を添えて、手紙を書いている。

涼月、マフラーをお奈津へ優しくかけてやる中、道具替わり。

エピローグ

歌⑥ 「私への手紙」 (リプライズ。全員)

おはよう こんにちはわ

おはよう さようなら

ぐるぐる廻る毎日

当たり前のお日様 当たり前の今日

ぐるぐるぐるぐる また言えるかな

おはよう こんにちはわ

おはよう さようなら

ゆつくりと明かりが変わってゆく。

プロローグと同じように、町の風景。人々が、いつもの暮らしを見せる。

郵便配達夫が、みなに手紙を配って廻っている。

道具が、割れて、中央に道が出来る。

荷物を持ったきくが、しっかり正面を向いて歩いて来る。二十一年間そう
して来たように。

静かに幕。